

第 3 章

満州国通信社

概要

1932（昭和7）年12月1日に創設された満州国通信社（通称・国通）は「日本在来のあらゆる通信社と異なり、完全な国策通信社であった」（『通信社史』364頁）。設立当初の本社は満州国の首都新京（現在の中国吉林省長春市）に置かれ、事実上の社長の主幹には南満州鉄道（満鉄）の嘱託だった里見甫^{はじめ}が、通信部長と連絡部長には聯合通信から派遣された佐々木健児、升井芳平がそれぞれ就任した。

国通設立のきっかけとなったのは、新聞聯合専務理事・岩永裕吉が著した「満蒙通信社論」だった。この論文は報道宣伝の具体策を模索する関東軍の要請でまとめられたもので、31年12月に関東軍に提出された。論文は満州に「政府の監督援護の下に強大有力なる通信社を設ける」ことを提唱。モデルとなったのは、岩永や古野が温め続けてきた「ナショナル・ニュース・エージェンシー（国家代表通信社）」構想であった。古野の根回しも功を奏し、関東軍は岩永論文を採用し、国通の創設となった。

国通は新聞聯合や、後継組織である同盟通信とニュース面で提携するとともに、人事面でも交流を進めた。『通信社史』によると、同盟社員は満州においては国通の外向社員扱いされた。

両社のこうした有機的な結び付きは取材現場でも効果を発揮し、39年5月にモンゴル国境で日ソが衝突したノモンハン事件では、タス通信を圧倒したという。

国通は45年8月、日本の敗戦で満州国が滅亡すると、運命を共にするように消滅した。戦後、ソ連に抑留された社員の証言からは、苦痛に満ちた体験の連続を感じ取ることができる。

● 旧満州（現中国東北部）の主な都市

[]内は現在の地名



第1節 国策遂行機関

岩永意見書が国通誕生の発端

船越武十（元満州国通信政経部次長）

終戦で大陸から引き揚げた満州国通信社（国通）社員は、再起の道求めて全国各地に散っていききました。それから二十数年たった昭和48（1973）年になって、佐々木健児さんを中心に国通会がつけられました。その第5回総会が52年6月3日、東京目黒の雅叙園（がじょえん）で開かれ、会員77人が出席しました。席上、佐々木健児さんから次のような岩永裕吉同盟社長追慕のあいさつがあり、皆深い感銘を受けました。佐々木さんは、その翌年1月亡くなられたので、これが国通同人への最後の言葉になってしまいました。

以下は佐々木代表あいさつ。

ここ雅叙園で国通会総会が開かれたことは、私には特に感慨深いものがあります。それは日本の通信社事業の育ての親とも申し上げるべき岩永裕吉先生にかかわるお話です。この雅叙園の土地は岩永家の所有でし

た。岩永さんは長与家の出で、岩永家に迎えられましたが、先代は日本郵船の重役でした。その財力のほどは、この広大な敷地や美しい庭園によって想像できます。

岩永さんは大正9年、私費独力で海外事情紹介の「岩永通信」を発刊、これを手始めに、国際、聯合、同盟と段階的に発展した通信社を主宰されました。聯合の頃は、毎月のように大きな風呂敷を持って、庶務部長の大川幸之助さんや、経理部長の石部幸式さんが、岩永邸に伺候（しこう）して株券を拝借。それを担保に銀行から金を借りて社員の月給を払ったというエピソードが残っています。その後、社運は開けてゆきましたが、経営はなかなか苦しく、岩永さんは何回かに分けてこの敷地を売却、最後にはとうとう、あの丘の上の洋館まで手放され、社業の運営につき込まれたのであります。

われわれとして忘れてはならないことは、昭和6年「満蒙通信社論」という岩永意見書を関東軍に提出され、これが7年のわが国通誕生の発端となったことでもあります。この由緒ある所に集まったのを機会に、みんなで先覚者の遺徳をしのびたいと思います。

（「新聞通信調査会報」第303号 1988年2月1日発行）

新米オペレーターのところ

高木益三郎（元満州国通信北平支局）

私の目には熱河戦の終了は、日中抗争拡大防止に多少なりと役立つのかとさえ思ったが、これは大変な見込み違いだった。

満州国通信社は天津の日本租界松島街のはずれにある醤油公司の一角を借り、大東通信社の名で天津支局を設けた。支局長は純情無比な島田福太郎さん。通州事件で殉職した人である。英文担当益田さん、編集全般を取りしきるK老人と、ガリ版を書く者が1、2人。それに発送の2少年と私といった、ささやかな世帯だった。間もなく、日本租界との境界辺りで爆弾事件が頻発するようになり、わが支局も無線室の外壁に鉄板を張るなど不気味な空気が漂い始めた。

親満義勇軍の名称も、ちらほら耳にするようになった。むし暑い晩のこと、島田さんが数人の中国人を無線室に案内した。時が時だけに薄気味の悪い雰囲気だった。私から一応機械説明を聞いた後、島田さんと私は室外に退出を求められた。話によると方振武將軍が長文の通電「声明」を発信することだった。

間もなく島田さんは通州に行き、帆足さんが後を継ぎ、新しくオペレーターとして小林春雄君が北平（現北京）に派遣されるなど、仕事は次第に拡大していった。北平常駐の小林君は私と違って物静かでハンサムな紳士であるが、数カ月後には私と交代した。私にとっては北平支局の仕事は、それほど辛いものではなかった。中国語の勉強には、これ以上のところはないからでもある。早速中国語の先生を雇って発音から習い始め、同盟支局にも顔を出すことに努めた。

支局のオペレーター兼記者の高見達夫さんは、何くれとなく私のことを心配してくれた。特にありがたかったのは、北平にいる朝日、毎日や、電通の特派員の皆さんに紹介してくれたことだ。公使館と武官府出入りの記者クラブにも入れてもらった。といっても私のような新米オペレーターに、まともな記事作りなどできるはずはない。皆さんのまねをして、メモなどを取ってみるだけの日が多かった。支局に帰ると朝日、毎日の打電記事を、こっそり傍受させていただいた。こんなとき、済南で蔣介石と毛沢東が会談したことが話題になり、各社は一斉にこれを取り上げた。しかし私には、これといった知恵も浮かばなかった。それから間もなく、本社から転勤命令が来て宮沢さんと交代した。

（新聞通信調査会報「第303号 1988年2月1日発行」）

編集局の日曜昼下がり

森井忠之（元満州国通信調査部）

満州国通信社本社社屋が、古びた中国風の四馬路から新築の中央通りに移転して間もなくのこと。たしか兒玉公園に柳絮の舞う初夏の好季だったと思う。調査部に在籍していた私はこの日、日曜出勤していたが、編集局は閑散とした屋下がり。整理部のデスク周辺では暇つぶしのトランプによる場が立っていた。新米の私にとっては、雲の上のような先輩ばかりであるから近寄りたい。

調査部は編集局の入り口近くにあった。ドアが開いて、森田久社長が



満州国通信社本社ビル＝新京（現長春）

立っていた。社長の愛称は森久さんだったか。謹厳実直、古武士のような人柄で、雲の上の存在。この日の社長は人柄にぴったりの大島紬（おおしまとう）の下、仙台平（せんだいひら）のはかまにフェルト草履だったので靴のように足音はしない。スー、スーと、整理部の輪に近づいていく。「社長がこられましたよ」と叫びたいが息をのんで見つめるばかり。

輪をつくっていた人も角度によっては気付き始めた。しかし鉢巻きをした前田義孝整理部長は後ろ向きで「もう一丁!」と、持ち前のカン高い声とともに景気づけに手を振り上げた。その横へ渋い顔の森久社長。振り上げた手も下ろせず悶絶（もんせつ）に近い表情のマーさんが、今も脳裏に焼きついている。

昭和14（1939）年1月、小野敏夫編集局長のお嬢さんが通っており、れた幼稚園の保母さんが偶然の知人で、この人の紹介によりあこがれのマスコミ入りが果たせた。23歳、青春真っ盛りである。所属は調査部。戸井田耕氏のチチハル支局行き（チチハル）の欠員補充であった。辻清一郎調査部キャップの不在を狙っての児玉公園野球場通い（満州国実業団リーグ戦観戦）が宮島武夫運動部長に認められ、その推挙によって向かいの満州新聞社（和田日出吉社長）に移籍したのが16年5月なので、国通在籍はわずか2年4カ月だが、この間の諸先輩との一期一会（いちごいちえ）の縁は一生の大きな支えとなる。戦後は国通会で交歓の機会も与えられ、松平九州雄氏（まつら九州）、牡丹江支社長（ぼたんかう）↓新聞協会大阪駐在）と国吉尊和氏（奉天支社次長↓社会タイムス主幹）のラインで、大阪の労組関係とのつながりが深まった。

（「新聞通信調査会報」第303号 1988年2月1日発行）

視察経済人の案内役も

溝口五郎（元満州国通信吉林支局）

昭和13（1938）年2月、福岡県大牟田から単身渡満の私にとって、新京北安路の古びた支那家屋の本社で聞いた無電の、ものさびしい発着信号音が今なお耳に残っている。

あれから49年。入社当時の人たちは、大方は亡くなっているが、新京駅に出迎えられた小野編集局長（時事新報時代お世話になった）、吉林赴任のとき、国務院、協和会などに紹介していただいた大西局次長、本社2カ月の訓練中、指導された鈴木通信部長、佐々木正晴部員、前田義孝整理部長、独身寮の伊藤信亮、支局長同士では牡丹江の桜川、延吉の中村、チチハルの坂下など忘れられぬ人たちである。菊池特派員の社葬と、依蘭事件で飯塚連隊長を戦死させた、かつての馬賊丁超氏の参列も印象に残っている。

吉林にはその4月赴任したが、大西局次長から「吉林は清朝発祥の地でもあり、満州の京都とも言われる景色も治安もよい所だ」との話だったが、列車には装甲車がつき、車内を銃剣、鉄かぶとの兵隊さんが巡邏する姿には、建国7年にしてもこんな情勢かと驚いた。

しかし落ち着いてみると、豊満ダムの建設と満州事変以前から木材関係で日本人も1万人以上。邦字新聞の吉林新聞も十数年の歴史を持ち、満字新聞も発行。旧城内には松花江流域の農林水産物、虎骨酒、高麗人参、鹿の角などの漢方薬の、北中支方面との取引が盛んで、事変下でありながら中国銀行支店が営業を続けていた。やはり良い町であった。

豊満ダムは吉林より20キロ上流に建設中で、北朝鮮の水豊ダム（日本窒素

施工と、国営と民営、満州と朝鮮、どちらが先に発電するかと注目の的であった。従って視察者が多く、日本からも同盟系の人や、三井合名の牧田環、東洋経済の石橋湛山、ダイヤモンドの石山賢吉など著名の士の案内役を務めた。松花江上流の琵琶湖の4倍に達する水没地の問題は全滿各紙に配信され、吉林支局の活躍ぶりを褒められたこともある。ただ内報のつもりで送った油田の発見が、戦後、大慶油田ではないかと思われ、当時「同盟吉林発」で東京の国民新聞、福岡の福岡日日新聞に掲載された記憶がいまだに残る満州の夢である。

（新聞通信調査会報」第303号 1988年2月1日発行）

最後の関東軍報道班員に

鮫島志芽太（元満州国通信新京本社）

満州国13年の建設が夢幻と碎ける日―昭和20（1945）年8月9日未明、首都・新京特別市は突如、空襲された。ソ連の参戦だった。この朝4時、私は児玉公園裏を駆けて満州国通信社本社へ行った。関口寿一取材班長がデスクにいた。午前6時、東部ソ満国境の前線特派を指示された。関東軍司令部の報道班長室で、軍報道班員の腕章を受けた。出るはずの飛行機はいなかった。空爆下の夜行列車で、弁当を持って前線へ向かった。ブラゴベシチェンスクと対岸の地、北安支局へ赴任する真下林平記者も一緒だった。中田・北安支局長の応召の補充だった。中田支局長は、内山ハイラル支局長らとともに「未帰還のソ満国境・国通（同盟

記者」たちの一人となった。

ハルビンと東部ソ満国境間の鉄道は、既に避難民でごった返していた。11日、牡丹江^{ぼたんこう}に着いた。駅頭の無蓋貨車^{むがい}の群衆の中には死児を抱いて放心している若い母の姿があった。ソ連空軍の機銃掃射によるものだ。ほとんどが東満地区開拓団の避難家族であった。牡丹江日本人会が、にぎり飯を配っていた。私は国通の牡丹江支社に急行、車中で書いた記事3本を専用電話線で吹き込んだ。

牡丹江は空襲が続いていた。私は松平九州雄支社長と駐屯軍で戦況を聞いた。間もなく軍伝令で前線へ出た。ムウリンの丘で、戦闘が展望できた。縦隊で街道を進んでくるソ連の戦車がノッキングして煙があがった。日本兵が背囊爆弾^{はいのう}で飛び込んだのだという。それでも戦車は止まらなかった。関東軍には、もう北辺鎮護の戦力はなかった。ソ連の進撃は速い。「東満前線 関東軍報道班員発」の記事を矢継ぎ早に牡丹江支社経由で送った。

それもできない時が来た。牡丹江電報電話局が自爆し、次いで国通支社が自爆した。最後まで「東京へ、同盟ニュースを」と、ともに頑張って、送話機を握っていた速記の「円正雅さんが「今、専用線を離れる」と悲痛的な声を上げた。8月15日だったか。戦争終結の勅語の再放送をラジオで聞いた。私は山中の一小部隊で報道の限界を説き、本部行きを訴えた。軍は戦場離脱罪で銃殺すると言った。私は頑張った。ただ「同盟ニュース」を送りたい一念だった。許された。が、結局、ソ連軍に捕まった。

〔新聞通信調査会報〕第303号 1988年2月1日発行

日満回線北端の速記者

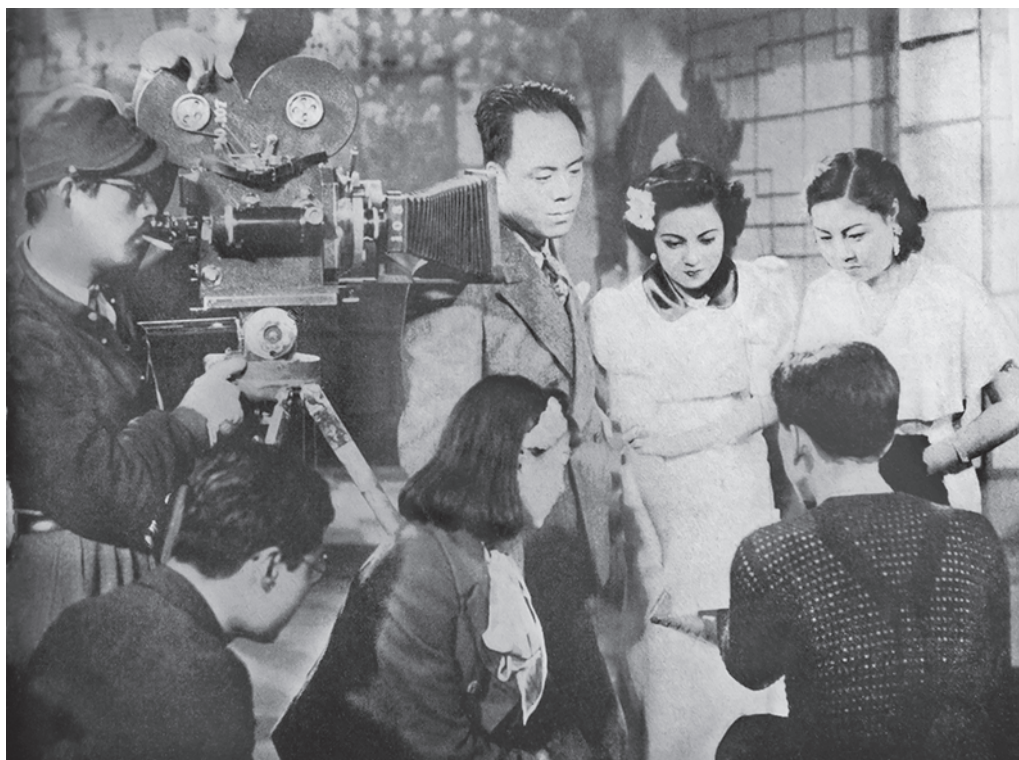
中川正和（元満州国通信ハルビン支社）

私が満州国通信社（国通）の新京（現長春）本社からハルビン支社に赴任したのは昭和14（1939）年6月16日である。満蒙国境地帯で起きたノモンハン事件^{ノモンハン}（5月～9月）取材のため、編集責任者風間正太郎氏は従軍中であり、新京から宮本基、平山貞之氏らが交代で出張して臨時デスクを務めていた。当時支社は支社長相原敏治、露文部長三田雅各氏で、露文部長がいて編集部長が職制上置かれていないのもハルビンらしいと思った。

「文芸春秋」「改造」「中央公論」はノモンハン事件の臨時増刊号を出すため特派員を派遣してきた。彼らはハルビン支社を訪れ、情報収集に努めたが、支社では「前線基地のハイル支局へ行ってくれ」と紹介状を書くぐらいで、何もできなかった。支社には畳一枚ぐらいのロシア語極東地図がぶら下げてあり、「これはソ連製のもですか」と質問する特派員もいたが、三田露文部長の話では12年6月、黒竜江上のカンチャズ（乾岔子）島で領有権をめぐるソ満間で紛争があり、「国境の朱線が島の南側に引いてあればソ連製でしょうね」と笑っておられた。

ハルビン支社が入居している弘報会館は、新京本社に負けない堂々たるビルで、邦字紙哈爾濱^{ハルビン}日日新聞、華字紙大北新報、露字紙ハルビンスコエウレミヤ、ザリヤの4紙が同居しており、地下に工場があった。輪転機が動いているときは、ごう音で街を歩く人の足を止め、観光パスも止まってガイドが説明した。

満蒙国境では小松原師団がソ蒙機械化部隊に壊滅的打撃を受ける負け



満州映画協会の撮影風景。前向き右から2人目は李香蘭（山口淑子）

戦だったが、ハルピンは穏やかな日々で、中心街の大通りのキタイスカヤも松花江しょうかうかうにもぎわっていた。北満の6月は夏で、太陽島へ水泳に出掛けるにはタクシーに乗るのが楽しかった。おんぼろフォードのオープンカーの運転手は白系ロシア人99で、右手を上げればどこでも止めてくれた。満席であればステップに乗せ、カーブを切るときは振り落としそうな運転をするので、あわてて座席の客の首っ玉にしがみつく。金髪の娘だつて怒らない。お互い松花江岸まで10銭の相乗り客。ロマノフ王朝の貴族の流れを受けた美人が多かった。このすばらしい流しタクシーは戦争拡大とともに姿を消した。

新聞社は北満が満州新聞、南満が満州日日新聞に統一され、満州新聞社社長和田日出吉氏と女優小暮美千代こぐれみちよさんが昭和16年に結婚、暗いニュースの中に華やかな大輪の花を添えた。17年封切りの「迎春花」には李香蘭、近衛敏明とともに小暮美千代も出演しているが、松花江上の洗礼祭10シーンは私も防寒服に身を固め見に行った。満映、満州映画協会の女優で、誰が人気があつたかと言えば、李燕芬、孟虹、鄭曉君らで、日本人の若い青年もこの3人の出演する映画には電影館へ足を運んだ。

作家の来訪も多く、第4回芥川賞『地中海』の富沢有為男いお、『満鉄外史』を著した菊池寛の影武者なる人などで、私はこの影武者氏に取材同行したが、質問の的確さ、頭脳の鋭さにびっくりした。流行作家がこのような影武者を使って広範囲に取材することを初めて知った。

17年には待望の日満直通電話がハルビンまで開通。支社の陣容も整備され、支社は支社次長兼編集部長坂下健一、通信部長三谷貞雄、写真部長三木雅之介の各氏でスタートした。三木氏は日中事変が始まったとき広安門一番乗りのカメラマンだが、門上から狙撃され重傷を負った。同盟より国通の方が地理的に近かったので現地に早く到達したが、「肥えこていたから手術に耐えられた」と祝福されると「あほうぬかせ！ やせ

ていたらタマに当たるかい」のエピソードを残した。

専用線開通時には当時のハルビン特務機関長柳田元三将軍が支社長の場合、案内で専用線と電送施設を見て回ったが、特務機関長らしく背広姿で白哲の顔はインテリくさく好感が持てた。インパール作戦ⁱⁱⁱで第33師団長として第15軍司令官牟田口廉也^{たぐんけんや}中将与意見が合わず解任される悲劇の将軍は、ハルビンの町で白系ロシア人を相手にソ連情報収集の元締めとして活躍しておられた日々が一番幸せであったように思う。

太平洋戦争発生とともに多忙を極めたのは露文部で「大東亜共栄圏」「東亜新秩序」「八紘^{はっこう}一宇」など辞典にないロシア語を造語するのに三田部長は苦勞された。新しく出版された露和辞典にこの苦勞の新語が採録されており憤慨しておられたが、辞典編者としてはハルビンの露字紙から無造作に拾い上げたようで、露文ニュースのほとんどが国通から露字紙に提供されているシステムを知らなかったのだろう。

日満直通電話線で活躍した速記者の半分以上は同盟から移籍した者であり、本社通信部長も小林徳宝、古賀薫一、岡本政美各氏ともに同盟出身者。通信部長のおけない牡丹江^{ぼたんかう}、チチハル両支社の責任者は副参事になっていた。新聞用紙が窮迫してタブロイド判になり過勤が廃止されると国通では過勤料に代わって技術手当を導入し1級30円、2級20円、3級10円を支給してくれた。本家の同盟が技術手当を検討しているというわさが流れただけで、国通は実施に踏み切った。私たちにとって召集令状がいつ舞いこむか分からない日々だから「地獄へのせんべつは何でも頂きましょう」の心境だった。

通信社の速記技能について先輩が触れていないので率直に書くと、実に優秀であった。大陸で机を並べて仕事をした同僚には、朝日、毎日から移って来た人もいたが、彼らは仕事量の多いのに悲鳴を上げていた。新聞社と比べ2倍から3倍の仕事を消化するので入社時のヘボ速記者も

たちまち腕を上げる仕組みである。電話速記のほかに関東軍参謀部に呼ばれての秘密会議の速記録は、翻訳終了まで司令部から一步も出ることは許されない。毎日が真剣勝負だからいやでも速記は上達した。講演や座談会があると引つ張り出されたが、16年ごろの速記料は1時間30円。年末の書き入れ時に月2千円稼いだことがあるが、2千円あれば当時土地付き2階建ての住宅が買えた。

ハルビンの哀しみ^{かな}は戦後白系ロシア人がソ連に連れ去られた一語に尽きる。YMCAで出会った少女もナハロフカの娘たちも囚人列車ストルイビンに幽閉されて北へ送られた。シベリア鉄道の大きな駅で抑留列車が引き込み線に入って待機していると、囚人列車が反対側の線に入構して長く停車することがあった。監視兵が向こうの列車に近付いて大きな声で話し合い、「中川、心配しなくともいい。あのストルイビンはウラル以西から来た連中だ」と報告してくれたのがせめてもの慰めだった。

（新聞通信調査会報」第395号 1995年10月1日発行）

のんびりしたハルビン時代

木島重治（元満州国通信編集局）

佐々木健児さんが満州国通信社で采配を振るっておられた頃、駆け出しの見習い記者の私は、「ハルビン支社に欠員ができた。君はロシア語をやった人間だから」とハルビン行きを命じられた。昭和8（1933）年のことであった。

当時、ハルビンには聯合は海路昌臣さん、電通は早川さん、朝日は相馬さん、毎日には森正蔵さんとベテラン記者ばかり。国通の本橋支社長は身体をこわして、取材は一切やらなかった。新米の私は、やむを得ずこれらの敏腕の支局長さんたちの後を五里霧中であつて回っていた。

国通のハルビン支社には中村敏君や風間正太郎君の面々がいて、まだみんな独身だったから、その日の最後の便をしめると、毎日飽きもせず夜の社会探訪に出掛けた。

支社は当時、デアゴナリナヤ街（斜紋街とも言った）をずっと行き、アジアホテルやキタイスカヤの入り口をさらに進んでユダヤ教会の筋向かいに近い角地にあつた。支社より少し北にはミナレットがそびえているイスラム教寺院もあつて、そこでは金曜日の礼拝日には地声の大きい男が尖塔の上にあがって、礼拝の始まりを告げていた。キタイスカヤの地下には、カズベクやオケアンなどのロシア人経営のキャバレーが5、6軒あり、それらの店は無論のこと、ハルビン随一のファンタジア辺りでもサインが利いた。

生活上、一番閉口したのは3度の食事、日本人飯屋がまだ1軒もなかった。月給で懐中が膨らんでいる間は、専らモデルンのレストランで威風堂々たるロシア人のウエーターのサービスに気をよくした。少し懐具合が頼りなくなると、向かい側の大衆的なウスチェブコフの食堂を利用し、もっと乏しくなると、中華飯店のギョーザに転じ、それもできなくなると、ピロシキや黒パン、カルパス、アグレツなどを手近のロシア食料品店へ仕入れに行き、自室に持ち帰ってパクつくという寸法であつた。そんなことを毎月繰り返していた。

国際列車の襲撃事件や、ホテル・モデルンの令息誘拐事件といった物騒な社会タネもあったが、今から思うとのんびりした時代であつた。夏の午後には外交弁事処でテニスをやったり、チューリン百貨店のロシア

娘を誘って、スンガリ（松花江）でボートに乗ったり、太陽島で泳いだり、ヨットクラブで納涼気分を味わったり、取材の帰りに「マルス」や「ミニアチュール」で落ち合つてビールのコップを傾けたり。みんな青春を楽しむ時間と金があつたようである。数えると、はや34年も前のことになる。

〔新聞通信調査会報〕第54号 1967年6月1日発行

酷寒の大興安嶺を搜索飛行

坂下健一（元満州国通信チチハル支局）

昭和10（1935）年の正月のことである。当時私は駆け出しで満州国通信社チチハル支局勤務であつたが、ちょうど正月の休みを利用してハルビンへ遊びに行つていた。4日から5日だったと思うが支社に立ち寄つたところ、思いもかけず新京（現長春）本社の佐々木健児編集局長から至急の指示が伝えられてきた。

それには、西園寺公望老公の身内で京都帝大の加藤とかいう学生と数人が、真冬の大興安嶺探検に出発したまま行方不明になったという報知新聞のハイラル通信員の報道で大騒ぎとなり、陸軍省から関東軍あて搜索命令が出されたとある。搜索機がチチハルから出るという話なので、その搜索に参加せよというのである。

私は慌ててチチハルに帰り、搜索機が満州航空チチハル管区所属のものであることを突き止めた。翌日、チチハル郊外の飛行場で初めて搜索

機のパイロットに会った。松井勝吾氏という好青年であった。使用機は400馬力の高翼単葉4人乗りの小型機フォッカーである。搜索機はその日のうちにハイラルに飛び、給油して現地の騎兵集団軍参謀藤原少佐が乗り込み、指揮を執った。最初の日はハイラルを南下、興安嶺一帯からの空中偵察であった。

その日の私は防寒帽に毛皮のシューパー(防寒用の毛皮のコート)、それに防寒靴、手袋を2枚に靴下も2枚重ねるといふ身支度だが、寒さを通り越した痛さで、機内にはもちろん暖房設備などあるはずはない。私は絶えず指先をこすり、足をガタガタさせて寒さを防ごうとしたが、とても我慢できるものではなかった。機外は恐らく零下40度を下回る酷寒であつたろうと思う。搜索機はリズムカルなプロペラの回転音と軽い振動を続けながら、まばらな雪と枯れ木ばかりの樹林の大地を2時間ばかり飛んだが、その日は不成功だった。

翌日2度目はハイラルからやや東寄りのコースをとり、ハロンアルシャンを指して飛ぶこと1時間ばかり。突然、松井パイロットがガラスをたたき、左前方翼下を指さした。そこには天幕の傍らで数人の人影が手と手拭いらしき物を振っているのが見えた。学生たちの無事が確認されたわけである。

搜索機は左旋回を続けながら次第に下降し、目標上空から藤原参謀が「すぐハイラルに帰れ」と書いた通信筒を投下。地上で拾い上げたことを確認すると機首を北に向けた。「人騒がせなやつだ」と藤原参謀がボツリと漏らした一言が私の耳に残った。ハイラル飛行場に帰着すると私は2人へのあいさつもそこそこの支局へ急ぎ、「行方不明の学生発見」の第一報を入れ、続いて搜索同乗記を送稿した。そのとき、私の原稿を無線で打電してくれた茂木学恵支局長も先年病没した。

(「新聞通信調査会報」第341号 1991年4月1日発行)

東条の一声でぶち込まれる

坂下健一(元満州国通信チチハル支社長)

身柄を拘束されたときの不安、いらだたしさ、自由への憧れ、青春時代の苦々しい思い出の一こまがある。それは数ある満ソ国境紛争の一つ、カンチャズ(乾岔子)島事件¹⁰に絡まるものである。

昭和12(1937)年7月1日、私はいつものように取材に出掛けた。勤務地は満州の北辺、満州国通信社のチチハル支局である。当時二十五歳の私。仕事も遊びも面白くて仕方のない生意気盛りだった。当時チチハルは人口約10万。うち1万が日本人であった。

北滿は暑い盛りであった。午後、特務の那須弓雄機関長(大佐)を訪れた。ゆったりとした温厚な武人、大変気さくな人で、記者会見にはいつも快く応じてくれた。

「国境ではこの頃、ちよくちよく事件が起きているようですが大丈夫ですか」「まあ大したことは起こるまい」――職員が一通の電文を持ってきた。大佐は電文を一読すると、それを私の方によこした。読むと「6月30日、黒河下流カンチャズ島付近のわが方水域に、ソ連砲艦3隻侵入せるをもって、わが砲兵はこれを攻撃し、1隻撃沈、1隻を撃破せり、わが方損害なき模様」とあった。砲艦撃沈の文字に私もビックリした。その頃の紛争は、小人数の越境程度から起こったものであったからだ。

「機関長、発表してもいいですか」「ウン、いいだろう」――那須大佐は悠々とした態度でOKをしてくれた。私はあいさつもそこそこの支局に帰って第一報を飛ばした。幸いに大成功で、私の第一報を同盟が全世界に流し、ロンドンではタス通信の報道より半日早かったという。

8月1日の午後になって、第一線指揮のため東条英機中将（関東軍参謀長がチチハルに飛来したと聞いた。私が出先から支局に戻ると、飯田台輔支局長が心配げに「憲兵隊から呼び出しが来ている」という。憲兵隊とは、取材上たまには酒席で一緒になることもあったが、呼び出しと聞いているのは何か薄気味悪い感情が先に立つ。

折り返し憲兵隊に出向くと、顔なじみの准尉が「坂下君、済まぬが2、3日留めるからな」という。何事かといぶかる私に、准尉は気の毒そうなお口ぶりで「実は東条さんが、君の例の電報を知って怒っているらしい。憲兵隊へは直々の命令があった次第だから悪く思ってくれな」とも言った。仕方がない。覚悟を決め、支局長に電話し、本社で処置してくれるよう依頼した。

憲兵隊での生活は別段変わったこともなかった。アルコールを除くほかはすべて提供してくれた。一、二度の簡単な取り調べの後には、新聞を読み、煙草を吸い、昼寝をしたり、隊内を散歩したりした。このように比較的わがままが許されてはいたが、やはり自由がほしかった。

ジリジリしライラの毎日が過ぎた10日目の朝、隊長に呼び出された。「心配だったろう。今日釈放する。ただし気の毒だがチチハルにいることは許されん。2、3日中に退去したまえ。君の処置はいずれ軍法会議で決まると思う」と難しい顔つきで言い渡された。仕方なく天津の同盟支局で働いていると10月になって、本社の大西秀治編集局次長から電報があり、「貴下は、軍法会議で免訴に決定す。おめでとう」とあった。

（新聞通信調査会報」第138号 1974年6月1日発行）

ノモンハンで爆撃機に同乗取材

坂下健一（元満州国通信チチハル支社長）

今年はノモンハン事件から50年に当たる。今振り返ってみると、あの事件ほど無意味で、しかも悲惨な戦闘は他に類をみないのではないか。

昭和14（1939）年の5月21日だったと思う。新京（現長春）の満州国通信社本社は、新京駅から中央通りを経て児玉公園の手前にあった。関東軍司令部まで歩いて10分くらいの近さである。夕方ごろだったと思うが、司令部参謀部2課の大越参謀から電話があり、「来てくれ」という。大越少佐とは一、二度、酒を酌み交わした仲で親しくしていた。関東軍司令部の応接室で、私は大越参謀から1枚の紙切れを手渡された。読んでみると、「20日午後、外モンゴル軍の一部が満蒙国境のハルハ河を越えて侵入してきたが、満州国国境警備隊が撃退した」とあった。

許可をもらって帰り、記事にして出稿した。この記事が同盟本社に転電されたかどうか私は知らない。なぜなら当時ソ満国境では毎日のように紛争があり、ニュースになるようなものは少なかった。ただこの短い記事がその後、数カ月間にわたる両軍の激しい戦闘となり、ハルハ河の名が一躍世界の注目を集めるとは、私はもちろん大越参謀、ひいては関東軍司令部も予想しなかったのではないか。その結果、関東軍の対策が後手後手に回り、戦闘は次第に大規模となった。

ハルハ河を挟んでの戦闘が激しくなり、世間が注目し始めた6月初旬、私はハイラルに派遣された。支局を足掛かりに小松原師団司令部、特務機関、憲兵隊、省公署等を回って情報を集めた。7月になると戦線は拡大し戦闘はいよいよ熾烈となり、日ソ両軍の航空隊が制空権を争った。

中旬になって同盟本社から高尾辰馬君がハイラル支局に来援した。その頃私はハルハ河の後方にある戦闘機隊基地（隊長・野口雄二郎中佐）に配属され、航空隊の模様を報道していたが、間もなく朝日から先頃亡くなった入江徳郎君が来て、社会部記者らしく派手に書くので参った。

そのうち外モンゴルの爆撃への参加が許され、ハイラルから軽爆撃機に搭乗して出発した。機種は最新の4人乗り九七式軽爆撃機で、私は4機編隊の2番機に搭乗した。機長は若い中尉、操縦者は確か片岡伍長という少年航空兵であった。全機で12機の編隊が国境を越え、国境から約200^キ内陸にあった外モンゴルの基地タムスク上空に差し掛かると、機の周辺にパッパツと黒い煙が散らばった。敵の高射砲弾である。胸がドキドキしてきたが、機長に促され機首の風防から下方を見てみると、突然日の丸をつけた飛行機が音もなくスーッと下降し、地上に激突して一瞬火を噴き黒煙が舞い上がった。

「あれッ」と思って機長を振り返ると彼の顔は真っ青だった。「4番機がやられたらしい」と声が震えていた。私は急いで後方射手席に行き、後ろを見ると、ポツカリ穴が開いて後続するはずの4番機の姿がなかった。途端に私は胸が一挙に苦しくなり、喉はカラカラに渴いてきた。操縦席の横に戻り、用意した昼食用ののり巻きを取り出したが食欲は全くない。ふと傍らの片岡伍長を見ると、平然と操縦桿を握って微動もしない。一心に斜め前方の編隊長機を見つめていた。この時の光景は今でもありありと眼底に残っている。

爆撃を終えハイラルに帰着し、搭乗機を離れると兵隊が走ってきた。「司令官が呼びびです」という。司令官は嵯峨少将と思うが、会うと開口一番、「君の搭乗機が落ちたという無電があったよ」と言われて驚いた。天幕の記者だまりの中から関口寿一君が顔を見せた。彼ははてっきり私の搭乗機が撃墜されたと思ったという。

ノモンハンの戦闘は、ナチス・ドイツのポーランド侵入をきっかけに停戦となった。それから日本は間もなく大戦に突入した。

（新聞通信調査会報」第327号 1990年2月1日発行）

振り回された関特演

中川正和（元満州国通信ハルビン支社）

関東軍特別大演習（関特演）が実施されたのは太平洋戦争開戦の年、昭和16（1941）年である。関東軍は旧ソ連を仮想敵として、ソ連と旧満州（中国東北部）との国境に大部隊を集結、一大示威行動に出たのである。

私は同盟通信社から満州国通信社に出向、ハルビン支社で国境の緊張などどこ吹く風ののんきな日々だった。そんな私に新京（現長春 本社）の小林徳宝通信部長（原注Ⅱ同盟から出向。後に同盟広島支社長となり原爆死）から突然電話が入った。「中川、関特演だ。ソ満国境を回ってこい」と言う。「ソ満国境を横目で見れば」との表題で、東部へ出てウスリー江から黒竜江へ出るコースで面白そうである。この両江を利用するのは、満州国軍の江防艦隊で、中国語に弱い私の介添えとして満文部の打字小姐（タイフーシヤオヂュ）イピストのお嬢さん）を付けてくれるという。こうして私は関特演に関心を持つようになり、揚げ句には振り回されたとも言える。その私が終戦後シベリアに抑留され、演習作戦の第1方面軍の作戦正面に想定された都市を転々としたのも因縁だろう。

降って湧いたような小林部長の指名に私は慌てた。大役である。部長

には「せっかくですが、私はY M C Aのロシア語科に通学していますので、お断りします」と答えた。部長は諦めず、「お前が時々社報に書くスケッチは面白いと評判だよ」と私をおだて上げたりした。小林部長の意図は、ちょうど大陸専用線が内地から延びてきたときであり、通信局の失地回復を狙った企画だろうと私も薄々感じていた。私の出張話を耳にした東寧支局長の中村敏さんは早速電話をくださった。「東寧は面白いよ。ぜひおいでなさい。山と山の間に行く大戦車兵団を見せてやるよ」とのこと。

確かに関特演の規模は壮大だった。内地から6個師団、中国戦線から14個師団の計20個師団を満州に輸送しようとするもので、このような大兵力がソ満国境に展開するには60日を要するとみられた。軍が膨れ上がったので、国通では牡丹江支社Ⅱ第1方面軍、チチハル支社Ⅱ第2方面軍、ハルビン支社Ⅱハルビンス務機関、新京本社Ⅱ関東軍報道部と担当が決まった。このため奉天、大連支社の影が薄くなったほどだ。仮想敵に仕立てられたソ連は神経過敏となり、緊張でピリピリしていた。山下奉文將軍が牡丹江に着任する際、ハバロフスク放送局は「明日着任」の予定稿まで出している。関東軍や、陸軍参謀部が「覆面將軍」と隠してもソ連に筒抜けであった。

軍の動員は、内地鉄道の3分の1、満鮮鉄道の全部を充て、満鮮の上陸地は大連、釜山、馬山(現昌原)、麗水などで、朝鮮半島を通過する人馬の1日の最大数は兵員1万人、馬3500頭という計画だった。関東軍の演習作戦は大兵力でウォロシロフを突く予定だったが、中国戦線から14個師団を移動させることに支那派遣軍総司令官が反対、実現は不可能になった。私の出張も、その後本社上層部が難色を示し、結局は不発に終わってしまった。

私は19年、東安通信部隊、20年、間島通信部隊に召集され、終戦後シ

ベリアに抑留された。関特演で召集された兵隊の大部分は太平洋戦争によって南方に転じ、一部が在満部隊に残されただけだった。

私がシベリアに抑留され、ウォロシロフの収容所にいるとき、近くの住民から「関特演ではソ連軍の命令で、老人、子供は国境付近から奥地へ移住した」と聞いた。関特演に特別の関心を持っていた私は、その後いろいろな資料を読んだが、住民を奥地に移したことは誰も触れていない。ウォロシロフからイマン、ビキン、ホールなど第1方面軍の作戦目標だった小都市の収容所に移る度に住民、子供から同じような話を聞いた。終戦時の関東軍の混乱ぶりと比べ、演習時のソ連軍の万全の措置(住民移住)は雲泥の差である。

(新聞通信調査会報「第445号 1999年12月1日発行」)

松岡外相と満鉄マン

西村清俊(元満州国通信整理部長)

松岡洋右外相は昭和16(1941)年3月12日、東京を出発、独伊訪問の旅に出掛けた。三国同盟締結後、ヒトラー及びムソリーニをはじめ両国の首脳と会って、枢軸国の実体と強化を自ら確認することが目的であると、報道されていた。

私は満州国内の新聞記者として唯一人許可され、満州国通信社を代表して同行取材することになり、翌日の昼すぎ、新京駅から日本大使館の吉富一等書記官と一緒に外相を乗せた特別列車に乗り込んだ。外務省の

坂本瑞男欧亜局長、加瀬俊一秘書官、陸海軍武官各1名等の随員がおり、同盟通信から岡村二一にいち社会部長が日本からの唯一の報道人として同行している。満鉄からは足立営業局長が一切の世話をするため乗車している。

外相は前の満鉄総裁であり、自分たちの総裁が今を時めく外相として国家の重責を担い、晴れの渡欧である。満鉄の上下を挙げて無事大任を果たされるよう祈っている満鉄ならびに満鉄マンの心意気と姿勢が、最有能幹部の代表、足立局長自らが乗り込んで片時もそばを離れず、立つて控えているのを見て直ちに分かった。

この列車は満鉄の表幹線である大連と新京（現長春）を結ぶ満鉄の代表的特急「はと」の客車を使って特別に編成したものである。展望車は初めて見る豪華なもので、広くゆったりとしてあたかもサロンのようである。寢室に続いて浴室、便所等が完備している。東京から看護婦とマッサージ師が同行している。展望車は満鉄が張学良ちやうがくりやう工作として歓心を買うため贅を尽くして製作した豪華なものであるが、満州事変で張政権は崩壊したので無用になり、車庫に眠っていたのを外相の晴れの壮途に使うため引き出してきたという。展望車にしてみれば思いがけなく晴れの日の目を見たのである。満鉄も消えた現在はどこにあるのだろうか。あれば興亡動乱の歴史を物語る記念物である。

私は外相が満鉄総裁だったとき、新京などではしばしばインタビューしたことがあり旧知であった。あいさつに行ってみると展望車のソファに座って早くも気炎を上げている。外相の話は一瞬として止まることなくしゃべりだしたら相手に言葉を挟ませないので有名であった。話は四方八方に飛び、そのうち外交のことに触れたので聞き耳を立てると「外交は男女の関係と同じだ。こちらは冷静で、相手を夢中にさせることだ。重光まもる（葵元外相）などはパリで一緒に遊んだときも、自分の方が先に夢中になるから駄目だ」などと松岡外交の妙諦みづからをあたり構わず放言している。

停車した駅で本社に原稿を送って再び展望車に引き返してみると、外相は相変わらず昂然こうぜんと面を上げてしゃべりまくっている。雨蛙あまづゐるが鳴き続けている感じである。いや背が低いので裏がまが胡坐あぐらをかいているような格好である。これだけ徹底してしゃべるのを見てみると、あきれて愉快にさえなってくる。たまにお灸のため寢室に引き揚げることがある。途端に静かになる。そんなときに私は食堂車に行く。東京から同行しているコックが何かうまいものでも作ろうと言ってくれる。「はと」の食堂車であるが、私以外に誰もいない。満鉄が特に選んだ美人のウェイトレスが2人、相手ができたときと愛想よくサービスしてくれる。

北満州の広野に日が落ちて夜も次第にふける。時折、駅に停車すると闇の中に人が近づいて車の下部をたたいて点検している。外相の眠りを妨げないようカンカンという音も小さくしている。外相の無事を祈る気持ちが伝わって来る思いである。

深夜、列車が扎蘭屯ジャラントンなど山中に停車すると、従業員たちが見送りのためホームに整列している。外相はデッキに立って期待に應えて使命を果たす決意を演説すると、一同は満鉄の社歌「東より光は来たる 光を乗せて東亜の土に 使います我等」を声張り上げて合唱し、その歌声が凍てついた深夜の大興安嶺だいこうあんれいに響き渡ってゆく。外相は感謝して大きく手を上げて応えている。私はこの松岡と満鉄マン、使命に育まれた人と人との心の通い、結びの美しく尊いものに触れて感銘した思いが忘れられない。戦後の日本のどこかに今もこのような場面と心の通いがあるのだろうか。明くれば終点満州里まんしゅうり。列車は無事国境の町に着いた。春いまだ遠く白雪の中に眠っていた静かな駅は、一行の到着でにわかに多勢の集まりでにぎやかになった。一行はしばし休憩の後、満州国内の見送りの人たちと別れ、出迎えるソビエトの列車に乗り込んだ。列車は白一色の広野に一筋の黒線を描き、黒煙を上げながらシベリアの彼方に消えていった。

月余の後、4月13日にモスクワで日ソ中立条約が調印され、晴れの外相一行の帰りを迎えて日本から大勢の記者たちが押し寄せて来ることを、この町は予見していたのであろうか。黒点が視界から消えるまでたらずんでいた私は、前夜徹夜したので、満州里第一のロシア宿ニキチンホテルに入り、前日からの松岡と満鉄マンのことを考えているうちに、いつしか深い眠りについていた。

〔南船北馬〕第5号 1985年9月発行

(1985年6月25日)

日満直通専用電話の威力

中川正和(元満州国通信ハルビン支社)

同盟通信社の日満直通専用電話線が満州国通信社奉天支社に延びたのは昭和14(1939)年10月。新京(現長春)本社に到達したのは16年7月である。この日満直通専用線が、最初に威力を発揮したのは松岡外相がベールンからの帰途、モスクワで、「日ソ中立条約」に調印(16年4月13日)、特急「赤い矢」が満州里に到着したときの報道合戦である。

(松岡外相に同行取材した同盟の)岡村二(にいち)さんの原稿を同盟へ直接読み込んでいるから、新京―大連間専用線(14年2月開通)を奉天で日満直通専用線に接続して処理したのだろう。編集局も通信局も引っくり返る騒ぎの中で、当時社会部長の大鋸(おおが)時生(ときお)氏が「おい、中川、松岡の満州里到着第一声の録音盤が満映に届いている。すぐに行って速記してくれ」と声をかけた。

大鋸氏と私は電聯合併直後の同盟京都支局で一緒だったので、直取引の形になり、通信部長小林徳宝氏はカチンときたのか、「中川じゃ頼りない。森中をやる」と後に朝日に転じた森中一人君が満映に走った。通信社に録音再生装置がなく、満映にあったのも当時の世相を反映して面白い。私は膨れ面で仕事をしていたのか、小林氏は「機嫌を直せ」と、この報道戦の社報原稿を私に書かせた。

岡村さんの原稿で今も思い出すのは「次から次へとすれ違う貨車には覆いを掛けられた戦車が大量に積み込まれ、西へ西へと走り去った」のくだりで、この時点から2カ月後の6月に独ソ戦の火蓋(ひぶた)が切られたことを思えば、中立条約成立と同時に極東方面の機械化部隊をヨーロッパ正面へ急ぎよ展開しようとしたソ連の大移動を、的確に描写した一こまで、忘れられない。16年には満州で派手に扱えない重要ニュースがある。関東軍特別演習(関特演)で、精銳(せんぱう)部隊が満洲に集結したことである。

日満直通専用線は、朝、毎、読の義望(ぎぼう)的であった。3社記者が「泣く子と専用線には勝てぬ」とボヤいたのは、いかに取材段階で先行しても、本社到達の送信が、申し込み電話では歯が立たなかったからだ。国通現場では福岡―新京間の日満直通専用電話線を大陸専用線、大連―ハルビン間専用電話線を国内線と呼称していた。

〔新聞通信調査会報〕第306号 1988年5月1日発行

ハイラル支局始末記

崎谷三郎（元満州国通信ハイラル支局）

昭和20（1945）年8月、私は満州国通信社ハイラル（海拉爾）支局にいて、6人の支局員のうちただ一人の生き残りとなった。私は当時のハイラル支局をどのように始末したかを旧国通ならびに旧同盟諸氏に報告する義務を感じている。それがいまだに果たせなかった。果たさない限り、私の戦後も終わらない。誌上を通じ、この私の責任を果たさせていただきたいと思う。

突然勃発した日ソ戦で、西北満の国境を目と鼻の先に控える軍都・ハイラルは、怒濤（どとう）のような赤軍機械化部隊を迎えて、野村守備部隊5千（独立混成第80旅団、旅団長・野村登亀江少将）は、終戦まで1週間、ほとんど半減するまで要塞陣地に立てこもって死闘を続けた。東満（とうまん）の東寧（とうねい）、虎頭（ことう）などの戦闘ぶりは割合よく知られているが、西満・ハイラル方面の戦闘は案外に知られていない。野村守備部隊の戦況報道に従軍した私にとって、それが残念でならない。手元にある旧満州国通信社同名簿によると、終戦直前のハイラル支局員は、内山真一支局長はじめ、崎谷三郎（外勤）、代田三郎、田次典男、広瀬朝嘉、若林春次の6人であるが、私を除いて、全部ハイラルの戦野に散ってしまった。

8月9日未明、赤軍爆撃機が乱舞する中を「不可侵条約があるのにまさか」と首をひねりながら、私は興安北省公署、ハイラル国境警察隊へ情報集めに急いだ。駐屯部隊司令部は移動の真っ最中で、憲兵隊は自ら火を放って炎々と燃え上がっており、とても情報収集どころではなかった。「まさか」と疑っていたことが現実となって、省公署、警察隊への情

報は、すべて悲観的なものばかりである。特に「有力なる敵機械化部隊はすでに満州（まんしゅう）里（り）国境を突破、ハイラルに向け猛進中」という報告があった。もう数時間にして、ソ連軍はハイラル市内に突入する情勢であり、市街戦も覚悟せねばならぬ緊迫の事態であった。

大急ぎで支局に帰ってみると、内山支局長以下全員は「防衛召集」で支局はがら空き。満人ボーイがおどおどしていた。防衛召集というのは国境が近いので在郷軍人に対し、平素から青紙に期日不記入の令状を渡しておき、いったん有事の際には、赤紙令状を用いなくとも所定の場所（ハイラル在満国民学校）に集合することになっていたものである。私は、その年6月末、新京（現長春）の通信連隊を満期除隊し、新京本社整理部の職場に復帰後、すぐハイラル支局に転じたので、まだ在郷軍人の移籍手続きが済んでいなかった。従って私にはまだ青紙の防召令状が出ていなかった。これが私の生命を救ったことになる。

満人ボーイの李、王両君が口々に「看々吧、支局長写字了」（支局長が書いていったのを見よと）って、黒板を指す。みると、大きな文字で「崎谷君、われわれは今から全員応召する。支局の後始末をよろしく頼む。家内と子供は至急、東ハイラル軍用駅から避難せしめられたい」とあった。考えている余裕もない。あと数時間で敵の戦車群がこの町に殺到する。私は、まず無電分室に飛び込んだ。そこには満州電電の若いオペレーターが1人、コツコツと受信している。私は、片手で受信ニュースをつかんで読み、片手で新京本社へ流すハイラル付近の戦況を書き上げながら報告の発信を頼んだ。

「本日未明、敵機械化部隊は満州里国境からなだれを打って侵入、国境所在の日満軍と激戦を交えたのち、数時間後にはハイラル市内に突入の態勢。一方、内蒙古ハロンアルシャン方面からもソ蒙軍が蒙古草原を疾駆して進撃中……」「バタ（社内連絡）Ⅱ天野編集局長宛て。わが支局は、

これにて連絡を絶つ。受信機的一切を破壊する。本社各位のご健闘を祈る。私はこれより当地守備の野村部隊に従軍する」。キーを打ち終わったオペレーターは驚きの目で私を見上げた。

「君はもう電報局に帰っていいよ。支局はこれで閉鎖するから」―私は、ガリ版に向かって、今までの受信ニュースの翻訳にかかり、大急ぎで満人ボーイに印刷させた。従軍したら、野村司令官はじめ参謀たちに読ませるためである。ニュースは日ソ戦勃発に伴う各地の戦況や満州国・張総理の布告などが主なものであった。印刷が終わって、満人ボーイ2人を呼んだ。「多々辛苦、謝々呀、一個人一百塊進上、回家好呀(長い間ありがとう。ついては100円ずつやる。家に引き揚げてよろしい)」

私は、7月末にもらったばかりの俸給全部を彼らに分けてやった。ボーイらは「多謝多謝」と三拝九拜。喜色いっぱい得意そと支局を出て行った。無理もない。かれらの給料は30円ぐらいであった。私は従軍を決意しながらも、この戦争はもう長くは続くまいと判断していた。しかし、どのような形で、終戦となるにしても、私は再び国通の仕事に戻れると思っていた。その際は、再びこのボーイたちに仕事を頼まねばなるまいなどとも思うのであった。

私は2階の宿舎に駆け上がった。奥の支局長社宅で、奥さんと子供3人がオロオロしていた。

「奥さん。さあ、この方角を真っすぐに行ってください。東ハイラル駅に着きます。そこに避難列車が待っているはずです。そこからチチハルの国通に連絡をとってください」

私は、広漠とした蒙古草原の一角を指さし、あたふたと一家族を送り出した。「サヨナラ、おじちゃん、おじちゃん」と内山支局長の姉娘・町子ちゃん(当時6歳ぐらい)が、かわいい手を大きく振っていた。

ガランとした支局に独りぼっちとなったわびしさ。感傷は許されない。

私は、まず重要書類箱から暗号表を取り出して焼いた。次いで送受信機の破壊に取り掛かった。後で考えればそんなことをしても大したことはなかったのだが。石油をぶっかけて焼こうと思ったが、石油はない。仕方がない。あり合わせのハンマーで心臓部と思われる箇所を、思い切り力いっぱいたたきつけた。大きな穴が開いて、みるからに不格好なものになった。

その瞬間、大音響とともに敵機の爆弾が社屋の一角に命中した。屋根が吹き飛び、大きな穴が開き、その破片がバラバラと階下まで散ってきただ。私は、送信機を破壊するのに夢中となっていたので空襲警報が聞こえなかったのか。あるいは、全市が混乱状態になって、警報どころではなかったのかもしれない。身を伏せ、土煙の中を、半ば壊れた階段をうように2階の宿舎に上がると、私の部屋はきれいさっぱり吹き飛んで、何一つ残っていないかった。

後始末をきれいにしようとした私の努力は、敵機の爆撃でムダになった。敵機が私の仕事を手伝ってくれたのだ。これで私の気持ちもきれいさっぱりした。退去してしばらく歩き、振り返ってみると、支局長の社屋は再度の爆撃で、窓という窓は完全に吹き飛び、屋根の一部に大穴が開き、無残にたたきつけられた建物に、折れ曲がった大アンテナがただ異様な感じで立ち残っていた。

付近の政府官舎団地は、自ら放った火で黒煙がもうもうとして燃え続けるのだが、私には、どうしても支局長の建物に火を放つことができなかった。私にはまだ「戦争が終わったらここへ帰れる」という気持ちがあったからだ。今になってみると、何と甘い考えかと思うのだが、これはあのときの偽りのない心情である。街頭には至るところに自転車が乗り捨ててあった。手頃なものを拾い、それに乗って駅裏にある要塞陣地に急いだ。そのときもなお、私は従軍記者として報道の任に当たる決意

に燃えていた。

翌10日未明、敵の大戦車集団を迎え、無数に掘られたタコツボの中からは、破甲爆弾を抱いた友軍兵士（在郷軍人と満州軍）が次から次へと飛んでいく。敵戦車の底をめがけて、文字どおりの「肉弾」「肉攻」である。ソ連軍は前夜中にわが陣地を十重二十重に包囲し、この朝から攻撃を仕掛けてきたのだ。

「あつ！ あちらでまた飛び込んだぞ」「こちらの方でも：」―私は陣地の上の監視哨で、双眼鏡からこのような凄惨な光景を幾度も見た。傍らに立つ安藤ハイラル市長と悲痛なささやきを交わしてはまた黙してしまふ。ズシン、ズシンという地響きがハラにこたえて、話を封ずるのだ。巨大な戦車群が迫ってくると、またしてもバラバラッといながらのように飛び込んでいく肉攻隊。生死を超越したその姿。これがこの世のものではないというなら、それは神々しい姿だと、私の目には映った。あの中に、内山支局長や田尻記者や支局の同人もいたに違いない。内山支局長の奥さんや子供さん、そして全婦女子が避難を完了するまで、敵の侵入を食い止めるのがハイラル支局全員の最期の運命であった。

〔新聞通信調査会報〕第58号 1967年10月1日発行

馬占山戦死の誤認と身代わり残してソ連に脱出

長沢千代造（元新聞聯合大連支局長、満州国通信社出向）

大正初期から昭和の敗戦まで四半世紀以上にわたる私の新聞社生活は、

戦争末期の中日新聞時代を除いては、主として満州、朝鮮、台湾など外地稼ぎだった。なかでも最も思い出の深いのはやはり満州時代と言えよう。

記者としてのスタートは横田実君と同じ大連の遼東新報社だが、日露戦後いち早く創刊。満州日日をしのぎ、満州では発行部数の最も多い日刊紙だった。入社当時の社長は大来修治氏で、現日本経済センター理事長大来佐武郎さんの尊父であった。

満州日日と違って御用紙ではなく、満鉄にも関東庁にも外務省に対しても忌憚ない批判を加えた。当時、日本における政党政治の弊は政友、憲政が激しく対立していたこと。政変ごとに満鉄社長や関東庁長官が更迭され、特に満鉄は政党のドル箱視されていた。政府の対満政策の一貫性などありようはでもない。これに対し遼東新報社は敢然と論陣を張り、ついに昭和3（1928）年、山本条太郎が満鉄社長就任とともに満日と合併された。それを契機として、私は古野伊之助先生のお世話で新聞聯合に入社、大連支局長を務めた。

同盟通信社では横浜支局長を経て、13年春、満州国通信社へ出向。17年、新設の中部日本新聞社常務取締役業務局長となるまでの間、最も長い満州での思い出は数限りない。私が扱ったニュースで忘れられない一つに、反満抗日、救国の英雄とたたえられた馬占山が「関東軍の討伐で戦死した」という報道である。

馬占山戦死の報道は、ご丁寧にも証拠品として彼の遺留品の写真などまでを送信したのだが、このスクープもその後間もなく本人がソ連に脱出し、再び中国本土に帰って内外に発表されて、「救国の英雄」「東洋のナポレオン」と華々しく脚光を浴びて再登場したのだから、いやはやこれには全く面食らったものである。

馬占山は河北省豊潤県の出身で、東三省講武堂（奉天の陸軍学校）を卒業

し、東北軍閥の將軍として活躍。張作霖が関内に進出したとき、山西に
出動。帰満後は北滿に蟠踞していた。一説には幼時から馬賊の群に投じ、
北滿緑林の大頭目となつた男だと言われていた。

6年9月18日、満州事変が勃発。その拡大に及んで北京の国民政府は
10月には張学良と万福麟との連署で、北滿にいた馬占山に黒竜江省主席
兼黒竜江総軍司令に就任を懇請した。就任を受諾した馬占山は10月6日、
ハルビンで東省特別行政区の張景惠と会談。数日後にはチチハルに入城
して「救国の英雄」として持ち上げられた。彼は日本軍との戦争で、民
を苦しめ郷土を荒廃させてはならず、チチハル城を戦禍から免れしめる
ことに腐心したようだが、関東軍の進攻で10月19日にはチチハルから海
倫に退却した。

一方、関東軍主任参謀板垣征四郎大佐は11月25日、ハルビンで張景惠
と会談の後、馬占山を帰順させるため12月8日、自ら海倫に赴いて馬占
山と会見、握手に成功した。馬占山は翌7年2月11日に海倫から松花江
を渡り、ハルビンに出て張景惠の紹介で多聞二郎中将、板垣大佐らと会
見した。16日には、奉天・大和ホテルにおける本庄繁関東軍司令官の各
省代表の招宴に列し、18日の東北行政委员会の建国会議には蔵式毅、張
景惠、趙欣伯、熙洽らの巨頭とともに満州建国宣言に署名し、馬占山は
正式に黒竜江省長に就任したのだった。

彼は2月23日、チチハルに入城。翌24日、盛大に黒竜江省長就任式を
挙行した。かくて北滿の平定が出来上がり、3月1日、満州建国とともに
に彼は軍政部総長に就任した。

ところが、満州建国1ヵ月後の4月2日夜半、馬占山は側近数人を従
えてひそかにチチハル城を脱出。拜泉、訥河を経て7日に黒河に入り、
直ちに黒竜江省仮政府を立て、旧黒竜江軍を編成して呼海鉄道、齊克鉄
道沿線に配置。全黒竜江省の官民に反吉林軍と呼応して、反満抗日戦争

に決起してハルビン、チチハルを奪回すると通電を発した。

この馬占山反乱のニュースは内外に大きなショックを与え、満州建国
工作の前途に不安と焦燥さえ駆り立てた。関東軍は馬占山軍大討伐の作
戦に乗り出し、日本陸軍としては初めて従軍宣撫班を随行させることを
企画。満州国協和会の前身である協和会が独自の立場で共産党に対する
思想戦を展開したのである。

馬占山の反満抗日は、ソ連と共産匪の策謀で敗残匪や馬賊の蜂起に
よって彼らが担ぎ出されたもので、北滿各県の農務会や商務会は、いず



ベルリンの中国大使館に姿を現した馬占山(左) = 1933(昭和8)年4月

れも協和会に加盟して討伐戦に加担するよう呼びかけた。そこで関東軍参謀の石原莞爾^{いしはら かんじ}中佐は彼らの要望を入れ、「攻城戦をやめて、兵匪だけを撃滅する」、すなわち匪民分離作戦を全軍に徹底させたのであった。

馬占山は5月15日に松浦鎮^{しょうぷ ちん}（松花江^{しょうかうかう}対岸）の第14師団に戦鬪を挑み、ハルビン奪回を企てていた。10師団も加わり、呼海鉄道に沿って馬占山軍主力の掃討戦を果敢に展開。5月24日から前進開始。27日には綏化^{すいか}を占領。6月1日には海倫を占領。馬占山の拠点、呼海鉄道沿線の討伐戦は着々と進められていった。しかし、鉄道沿線を一步離れると、北満の荒野は高粱^{こうりやう}が繁茂し、道路も橋もない。討匪行軍は容易なものではなかった。しかも、この年は6月から未曾有の降雨続きで北満一帯は大洪水に見舞われた。

歩兵の行動が困難となったので、馬占山追撃のため騎兵第1旅団も派遣された。しかし、いずれも苦戦のうちに転々する馬占山を追い回し、ついに7月26日、劉家店南方6^キの地点で馬占山軍主力約800人を発見。翌27日早朝から攻撃を開始。28日には追撃に移り、29日午前3時半、彼らの露营地を襲撃して一挙にせん滅したのであった。

この情報をキャッチして現場に駆け付けると、その容貌、服装からして戦死体は馬占山に間違いない、と認められた。おまけに所持品の中には板垣大佐との往復文書や同大佐から贈られた写真なども含まれており「馬占山戦死」の第一報打電となったのである。これは決して作偽的な報道ではなく、現地軍関係の確認に基づく報道として、全世界のニュースとなったのである。

ところが、その後、明らかにになったことは、馬占山の戦死は身代わりであって、彼はソ連に脱出し、やがて蒋介石の下に復帰を許され、終戦後、蔣總統から満州軍総司令に命ぜられた。もちろん、そのときはすでに満州はソ連軍に占領されており、中共軍が根を張り、彼の満州軍総司

令も空名に終わり、一時は世界に勇名をはせた「救国の英雄」も1950（昭和25）年、病死したのであった。

満州事変から終戦まで14年間の思い出は、いつしか夢幻のように消え去った。民族協和、王道楽土の理想実現を目指して誕生した満州国も「楽土から奈落へ」跡形もなく転落崩壊した。人事^{ずうじん}茫茫、世事^{じじ}茫茫、夢は満州の野を駆け巡るにつれても、往時の馬占山戦死の取材、報道は今なお、私の頭の片隅にこびりついている。

（新聞通信調査会報」第116号 1972年8月1日発行）

第2節 「国通」の終焉^{しゅうえん}

座談会

満州国の最後

1964（昭和39）年6月18日

（出席者）

関口寿一

（取材部長）

坂下健一

（チチハル支社長）

宮沢貞男

（編集局次長・連絡担当）

東信夫

（外信部長）

松田悟

（取材部）

佐々木健児

（通信部長）

板垣武男

（同盟通信社経済局長）

（編集者注）板垣以外の役職は満州国通信社在籍当時のもの。

❖
❖
❖

司会（編集委員会） 終戦で満州国がなくなった結果、国通（満州国通信社）

も最後になった。それらの過程を通じて、いろいろわれわれの知らないこともあるはずです。本日はそれらの経験談をお聞かせ願いたいと思う。『通信社史』にも満州国通信社のことは書いてあり、成立の経緯は相当詳しい。しかし最後は極めて簡単にしか書かれていない。日本が敗戦になって満州国も滅亡したので、これと運命を共にした、ということになっている。そういうところを補いたいため関係者にお集まりいただいた。満州国側では7月ごろには日本の敗戦が分かっていたようですから、だんだん雰囲気も変わってきたと思う。

国通の取材部長をやっておられた関口さん、編集局次長（連絡担当）をやっておられた宮沢さん、チチハルの支社長をやっておられた坂下さん、東さんはタス通信との折衝をいろいろやり涉外関係で活躍された方、松田さんは国通関係の女性、子供、家族の引き揚げを引率されて、これまた非常に苦勞をされた方です。そういういろいろな面からお話を伺いたいと思います。なお関口さんと東さんはソ連に抑留され、宮沢さんは中国に抑留されましたので、それらのお話もお伺いしたい。佐々木さんはいろいろな事情に詳しいので、助言をいただくことにします。まず全般

的なこと、終戦前後の関東軍、満州国、在留邦人とかについて関口さんからよろしく。

関東軍は満州籠城を準備

関口 記憶は薄れましたが、ご存じのように、日本の体制としては満ソ国境を固めながら南に向かって行こうということになっていた。ところがおしまいは、材木の大砲を並べるようになっていった。いわゆる数だけそろえるような状態でした。これは確か敗戦の年の初めから続いていたように思う。われわれは国策に準じ、依然として北の守りということとを報道の重点に置いてやっていたように記憶します。そういう状況の中で、日本の状態は悪くなって本土決戦という姿が出てきた。1945（昭和20）年6月の沖縄陥落以後は、日本と関東軍の考え方が非常に違ってきて、関東軍独自で日本は滅びても満州で独立しようという気風が相当、関東軍内部にあった。それを反映して満州国政府の中にもあった。ただ満鉄（南満州鉄道）関係の人たちは若干違って、日本的な考え方が相当強かったように思う。

極端に言えば、満州籠城という感じが沖縄（陥落）以後非常に強くなつて、満州の地形的影響その他からいつて通化省¹¹⁵の山を中心にしたところで何年でも籠城しようという感じが相当強かったように思います。それまで満州では、中共（中国共産党）の毛沢東のゲリラに悩まされていたが、そのゲリラ戦術を逆にわれわれがやろうじゃないか、という雰囲気の中で関東軍が準備をし、満州国政府もそれに準じてやっていた。一般的にはそう思われます。

佐々木 沖縄の戦争は最終段階として発表されたのは6月25日です。6月の終わりに沖縄は落ちた。

関口 それ以後、急速に準備が進められた。新京³⁵に軍人会館があつて、各社の取材部長がそこに呼ばれた。当時の満州新聞の森田甲子三取材部長、今、仙台放送にいる康徳新聞¹¹⁶の尾形報道部長、それと私が1週間くらい缶詰にされて、通化に籠城することとで、ゲリラ戦の報道について相当教育を受けた。意見を聞かれるのだと思つたら教育を受けた。沖縄戦直後に3、4日ぐらい缶詰にされて教育された記憶がある。これは極秘にしてくれということだった。無論当時の天野編集局長には話したが、そういうことはほとんど知られていない。少なくとも関東軍なり満州国の態勢としては、通化籠城という線が相当強く固まっていた。

8月初めソ連が参戦し、8月15日の1週間ぐらい前だったと思うが、関東軍から「通化に報道班を1班編成して出せ」ということで、僕が班长格になり無線は江川君ほか1名、現在、共同通信にいる山田文化部長ら僕を入れて5人ぐらいの籠城報道班を編成、悲壮な覚悟で通化へ行った。8月10日前後だったと思う。通化へ行った途端、敗戦の詔書を聞いた。

類推すると、計画はあつたにしても、8月に入ってから周章狼狽^{しやうぼうたい}して籠城計画を立てたが、こんなに早くこういうことになるとは思つておらず、極めて皆さんの計画のような気がした。通化へ行った途端に敗戦で、部隊へ行つたが、部隊そのものも非常にお粗末で、これで籠城できるのかと思う施設であつたことが思い出される。

板垣 満州籠城説は非常に面白いと思うが、ソ連の参戦とか米軍の攻撃をどういうように防ぎ、籠城が可能ということになったのか。

関口 よく分からないが、ご存じのように関東軍は日本と仲が良くなかった。独自の行動が強かった。国策で本土決戦ということになり、関東軍の北の守りは無用になったととり、非常に感情的になったと思う。

板垣 ソ連参戦も計算に入れての籠城計画だったのか。

関口 ソ連に対してということでした。

板垣 米軍も計算に入っていたのか。

関口 実情を言うとはソ連のことで頭がいっぱいだった。無論米軍のことも頭にあったと思う、対抗政策として。しかし出てくるのはソ連のことばかりだった。

板垣 籠城計画はずさんだが、一大決心をしたのにそれが終戦の詔書とともに崩れ去ったというのはどういふことか。初めから日本本土が亡びても構わないという決心だったんでしょう。

関口 引き続き籠城して、終戦の詔書があっても引き揚げない兵隊はいっぱいいた。しかし部隊全体としては「命令が出たので、もう引き揚げろ」という状態だ。前線は終戦の報を知らないし、司令官の考えで捕虜になったところもある。解散した部隊もある。中隊、小隊で分散して勝手に山の中腹に穴を掘って残り、最後まで中共軍と奮戦したのが通化にはかなりいたと思う。われわれは長谷川という報道部長が引き揚げるといふので、報道部と一緒に引き揚げた。新京には普通なら10時間くらいで行けるのに3日くらいかった。途中歩いたり、泊まったり、非常な混乱状態だった。

司会 その頃、満州国皇帝¹⁷は政府と一緒に通化へ行っていたのか。

関口 そういうことです。

司会 当時新聞記者は行っていなかったのか。

関口 行っていないというより、行かせなかった。行ったのは皇帝と宮廷関係で、政府関係者は8月15日現在、新京にいた。

司会 満州国政府は終戦に対し、全体としてどうだったのか。国の盛衰に関しては経験もあるし、敏感だったと思います。

関口 終戦の詔書があつて3、4日たち、新京に帰ってきたら青天白日旗が出ていた。日本人は非常に肩身の狭い思いをした。

司会 宮沢さんのところは東京から終戦の情報はいろんなものが入ってきたと思う。軍関係、その他の関係がゴタゴタした状況はあったか。

宮沢 国通自体の情報網を持っており、「日本が危ない、ポツダム宣言うんぬん」ということは10日ごろから感づいていた。関東軍の浅田大佐・第4課長に情報は届けていた。むしろ日本から来るニュースに捏造されたようなもの、「最後までやるんだ」というニュースが多かったように感じている。しかし重慶放送¹⁸を聞いたたり、米国の宣伝放送を傍受したりして、日本が危険な状態になっていることは、関東軍上層部も知っていた。

東 私 は特別調査室にいた。翻訳陣が7、8人いて宮沢さんのところで傍受したものを翻訳する仕事をやっていた。広島に原爆が落ちたとき、関東軍の大佐が来て原爆とは何だと聞かれたが、ちょうどAPのニュースがあったので、核分裂とは大きなエネルギー爆発のことだと説明した記憶がある。

8月8日だと思うが、夕方帰るころ、宮沢さんのところから電報がきた。APのサンフランシスコ発の船舶向け放送だが、ワシントンでは近く日本が全面降伏するという情報が入って騒いでいるというものだった。その前にスイスを通じて日本が連合国に降伏を申し込んだという情報が盛んに入ってきて、これは大変だと思った。

すぐ電報を(理事長の)塚本義隆¹⁹さんと(編集局次長の)松田(常雄)さんに持って行ったが、「敵の宣伝にだまされるな」と怒られ、相手にされなかったことを記憶している。それからポツダム宣言受諾の申し入れがあり、8月11日か12日にあの有名な同盟の欧文放送があった。いよいよ日本はポツダム宣言を受諾するというもので、これは途中で切れていた。後で分かったが、これは同盟が出したもので、途中で軍の命令で切ってしまったとのことだ。その情報を関東軍の4課に連絡した。当時菅沼さ

んが1等兵で、私のところに翻訳済みの情報を取りに来ていた。12日の夜だったと思うが、関東軍司令部の軍人の大部分は移動してしまったように覚えている。

取材部の高橋という若い男の義理の父が軍属で、その人の官舎にコメを取りに行った。国通の建物に籠城するつもりだった。行ってみたら誰もいない。食べかけの夕食がお膳の上にあった。酒が何本もあった。当時酒がなかったもので、2人で飲んで帰る途中、兵隊が塹壕を掘っていたので「御苦勞さん、でももう戦争は終わりです」と言ったら憲兵が走ってきて私を引っ張り司令部へ連れて行った。さんざんたたかれた後、中将の前に連れて行かれた。国通の者だと言ったら、国通の情報は確かだ、終戦は間違いないということで、私の釈放を命じた。私をもらい下げに来てくれたのが関口さんだった。

帰社後、社内に缶詰になり、終戦の放送を社内で聞いた。ソ連参戦のときも宮沢さんと一緒に働いていた。モスクワ放送を受信しているオペレーター^{レター}の背中越しに記事を翻訳し、情報を流した。ソ連参戦の理由が色々を書いてあった。

終戦知らず戦う日本兵も

宮沢 終戦時、関東軍報道部の軍属から「前線部隊に、もう戦争は終わったから無駄な抵抗をやめろというニュースを流してくれ」と頼まれた。ソ連軍にもタスを通じて働き掛けてもらいたいということだった。当時、満州電報¹³の対欧通信系は新京・寛城子^{かんじょうし}とスイスのベルン無線局の交信だけだったが、これも15日を境に途絶えていた。この通信系を使用できないか、満州電報と交渉した。

電文は英語で、松田常雄氏、野中さんと関東軍軍属の人が作ったよう

に記憶する。8月17日、ベルン局を呼んだら応答があった。そこで電報のタスへの転電を依頼した。ソ連政府に「日本政府は降伏しているから前線の日本将兵に降伏のビラをまいてくれ」と依頼した電文だ。あのころ寛城子に関東軍の通信隊はいたが、通信は混乱し、国境方面との連絡は取れなかった。

日本降伏後も依然相当の抵抗が続けられており、やめさせなければならなかった。国通が傍受していたらベルン局が電波をキャッチしたので、やれやれと安堵した強い記憶が残っている。本来から言えば、日本の出先機関がやるべきだが、混乱してこのような機能はどこにもなくなっていた。国通が主体になってそういう仕事をやれたことは、大きな貢献をしたと思う。

1年後の話だが、私が国通の無線機材とともに中共軍に牡丹江^{ぼたんかう}を経て東満^{とうまん}・満州国の東満州省に連れて行かれる途中、各地に日本軍の武器や鉄カブトがゴロゴロしていた。住民に聞いてみると、9月に入っても終戦を知らず抵抗していた日本軍が各地にいたとのことだ。前線ではやはり終戦を知らずに無駄な抵抗をして死んだ人が相当いたように感じる。特に勃利^{ぼつり}、虎林^{こりん}付近がひどいと思った。

板垣 タスがOKした後はどうやったのか。

宮沢 関東軍の軍属と国通で日本語とロシア語のビラを作り、飛行機で散布する計画を立てた。しかし戦争状態が終わっていないので日本軍の飛行機を飛ばすと落とされるというので中止したように聞いている。ソ連軍に依頼する話もあったように記憶している。

佐々木 国通のタスへの呼び掛けはどこから出したのですか。

司会 呼び掛けは誰の名においてやったのか。

宮沢 塚本、天野、野中、松田、野間清さんが知っているのではないか。佐々木 国通という通信社がタス通信に呼び掛けたということだが、関

東軍のものなのか。

宮沢 関東軍ではありません。

板垣 国通の平和運動か。

佐々木 国通が同業のタス通信に呼び掛けて、「俺の方でやるからお前の方でもやれ」ということなら非常に面白い。

宮沢 ベルンにモスクワに伝言してくれと言った。傍受したら、やっていて送り終わって終止符号を出したのでみんな安心した。

佐々木 一つ調べてみよう。国通の考えでやったのか、軍がやったのか。

宮沢 関東軍軍属が何とかしてくれと話を持ってきただけだ。

佐々木 タスには国通が呼び掛けたと想像されますね。

宮沢 数人でやった。私も呼び出された。塚本さんもいたように記憶にある。

佐々木 ソ連が侵入してきて辺境で激戦があったが、国通の通信線の状態はどうだったのか。

宮沢 支社局とのニュース交信は25日ぐらいまでだったと思う。もっともその間、国境のハイラル、東安などは15日を過ぎたら引き揚げたり、電報がつかなくなったり、本社自体も混乱してしまい、同盟のニュースを受信する程度じゃなかったか。

佐々木 国通自体のニュースは15日で全部駄目になったのか。

宮沢 大連、奉天などは25日ごろまでやってた。

坂下 チチハルは15日以後もやってた。

東 ソ連越境のニュースを傍受した。私はハイラルにいたので、あそこに関する戦況をよく覚えてる。9日の午前0時ごろだった。宣戦布告が。その晩、新京にも空襲警報が初めて鳴り渡った。ソ連軍は一挙にハイラルまで入ってきた。速かった。

坂下 ソ連軍が越境したのは9日の午前0時だったか。

東 攻めてきたのが先か、宣戦布告が先か、どっちが先だったかよく分からない。

坂下 僕は9日の明け方2時ごろ、ハルビンからの電話で起こされ、新京とハルビンが爆撃されたと聞いた。

司会 形の上では8日に宣戦布告があり、9日^{ふつぎよう}払暁にかけて三角山というところを越境している。

関口 宣戦布告を聞く前に爆撃されている。

松田 新京で宣戦布告を聞いたのは9日午前3時ごろ。社宅で頼まれた原稿を書いていて起きていたので、社に電話したらソ連が参戦したという話だった。

宮沢 あのととき、満人と撃ち合いがあったね。20日ごろだったが、満人が暴れて日本軍が国通の横に山砲並べたりした。

司会 満州国総務部長の古海さんが書いているが、8月17日に緊急会議を開いて満州国の解体と皇帝退任を決め、満州国は消滅したわけです。国通自体の活動はいつまで続いたのか。

関口 向こうの兵隊が入ってくるまでやってた。

新京本社にソ連軍

司会 ソ連軍が9月10日、新京に入った。

関口 少佐ぐらいが隊長で4、5人、国通本社へドカドカとやってきた。対外情報欲しいと言ってきた。

東 関東軍の軍属が引き揚げた2日後だったから15日ごろだ。国通の人たちの家族も引き揚げると言われて、みんな朝早く本社に集まったが、15日以後は国通にはほとんど人がいなくなったことを覚えている。僕は家にいてもしょうがないので、また情報をキャッチするのが大事だと

思って、毎日国通へ出ていた。他にも2、3名出ていた。連絡部も傍受を続けていたが、みんな何もすることがなく、どうなるか分からない状態だった。社内ではばくちが流行して皆よくやっていたが、社内はガラ空きだった。最初に来たソ連将校はレニングラード大学（現サンクトペテルブルク大学）の英語の教授をしていたというセルゲイ・イブノフ大尉とデミトロフ大尉の2人だった。17日ごろだったと思う。

宮沢 あれはもっと後、20日すぎじゃなかったか。

東 情報が欲しいと言うので、連絡部が傍受した無電をガリ版にタイプしたりした。出社しているのが4、5名しかいなかったが、そのグループで仕事を始めた。ある日、イブノフ大尉が表にタス通信社の看板を掛けた。私がタイプする英文記事をソ連将校と軍属がロシア語、支那語に訳していた。イブノフとデミトロフは政治将校で、工作本部を設けて満州側に働き掛けたりしていた。後でどんな他の将校も来て、全部で10人ぐらいになった。支払いはソ連の軍票¹¹⁹だった。

関口 月給ももらったね。

司会 通信は出したのか。

東 それは全然やらなかった。海外放送をキャッチして、それをタイプしたり編集してソ連側に渡した。

佐々木 日本側とか居留民にはニュースは流さなかったのか。

宮沢 ニュースを流す組織はなくなったが、複写したものを日本人の関係方面に配っていた。終戦後1週間くらい活動していたが、社内はがらんどうになってしまい、閉鎖されたと思う。

関口 相当期間やっていた。12月初めごろまでそういう業務は続いていたはずだ。

東 僕は12月8日ごろ、ソ連に引つ張られてしまったし、最後はタイプライターや机やら何から全部持っていかれた。

関口 情報やっていた部隊も解散して、11月に彼らは全部引き揚げた。僕らの班もそれで解散した。

司会 11月末に向こうに引つ張られて行くまで出勤していたのか。

宮沢 時々出勤していた。3階で海外放送を傍受し、それを菅沼君らが適当に日本の関係者に流していたようだ。

司会 15日の終戦までは日本軍が治安維持に当たっていたが、終戦がはっきりした時、満州国軍から「今度は俺の方が治安維持に当たってやろう」という動きはなかったのか。

宮沢 そういう動きはなかった。私が感心したのは、青天白日旗はいつ用意したのか、すぐ出していたこと。帽子なんかもつけて肩で風切って歩いていた。

司会 組織的な満州国軍の動きはなかったか。

宮沢 部分的にはあったかもしれないが、組織的な動きはなかったようだ。

東 15日の終戦の詔勅放送があったと同時に、朝鮮人の居留民団は中学生、高校生が銃を持って居留民団地の周りの警備に当たった。関東軍の兵隊は歩哨^{はしやう}に立っていたが、弾は一発もないというのに、朝鮮人居留民団の周りに並んだ中学生や高校生はみんな弾を持っていた。あれには驚いた。日本人は全然団結してなくて、みんな外へ出るのを恐れていた。

国通もがら空きで、ニュースを傍受していた者だけだった。宮沢さん、江川君もいて一生懸命傍受していた。ソ連兵が塚本さんの理事長室に寝台を持ち込み、将校が寝室にしており、病院からアルコールをかつぱらってきて、ウオッカの代わりに私たちにも飲め飲めと言うので飲んだ記憶がある。

司会 坂下さんはチチハルからいったん新京へ引き揚げたわけだが、どのような状況でしたか。

坂下 終戦をチチハル支社の2階で家族と聞いたが、ホッとしたようなガツカリしたような妙な気持ちだった。ソ連が越境したので、その翌日、満鉄の引き揚げ第1列車で女、子供をハルビンに逃した。ところがハルビンから先は松花江の氾濫で列車が不通となり、ハルビンで待機しているうちに持ち金もなくなった。社員をつけずにやったため非常に苦勞させてしまった。男子社員は全員支社に移り、籠城してソ連軍が来るのを待った。ソ連軍が入城してきたのは十二、三日ごろだと思います。当時、田中三郎という特務機関長が僕と一緒にソ連軍を迎えに行こうと言っていたが、「武士の情けだ。白旗を持って行くのは見逃がしてくれ」というわけで、僕は途中で帰されてしまった。

ソ連軍の侵入後2、3日は、ハルビンとの電話連絡もついたように覚えていた。それからは新日本社からは指令も来ないし、支社の独断ですべてやった。銀行からは預金を下ろし、生活物資を買い集めたり、庭の木を切ってまきを作ったり、暇になれば酒を飲むなど、今考えれば全くあてなしの毎日だった。

チチハルには師団司令部があり、そこで武装解除されて1カ所に集められた。8月の終わりごろだと思う。僕はそのときは家族もいないし怖いもの知らずで、ソ連軍司令部に取材に行ったこともあった。ソ連人は新聞記者と音楽家を非常に大事にする。「俺はジュルナリストだ」と言うと大事に扱われて、副官クラスに会々と、「お前、どこでロシア語覚えたか」と聞かれたりした。チチハルに関する限り支社では何ら動揺はなかった。

日本軍がいる間は支社は平静だった。支社以外の社宅は全部暴民に荒らされたようだが、危害は受けなかった。ソ連兵が入って来た直後のある日の夕方だった。ドアにロシア語で満州国通信社チチハル支社と出していたのだが、ソ連兵が5、6人、入ってきた。ちょうど酒を飲んでい

たので焼酎を飲ませたら初めは紳士的だったが、次第に荒れて「お前は生意気だ」と銃を向けられる始末で、冷や冷やものだった。インテリ風の一人が、政治委員だと思うが、酔っ払いをなだめて帰れ帰れと言って帰してくれた。

11月ごろだと思うが、いよいよ脱出しようということになった。当時、社の満人職員に牛俊峰という男がいて、石原莞爾いづはらかんじ中将の東亜連盟論に心酔していた。ボーイからたき上げて終戦の時には満人関係の主任をやっていた、なかなかできた男だった。この男が弟を変装させてハルビンに派遣したところ、われわれの家族がハルビンで苦勞していることが分かった。金もなく、こじき同様の生活をしていたらしい。私の次男もそこで死んだのだが、そういう情報が分かったので、職員に諮ったところ、行ってもよいというので脱出した。

チチハルの日本人の一部が南下することをソ連が認めたので、北安回りの貨物列車で出発した。結局チチハル、ハルビン間が3日かかった。僕ともう1人、岡本太郎という僕より年配の支社員が一緒だった。この男は後に発疹チフスで死んだそうだ。チチハルの支社は南北七つか八つの支局を統括していたが、そのうちの一つ、ハイラル支局長の内山君はソ連の越境と同時に動員されて戦死し、あとの職員は結局バラバラになってしまったようだ。

国通社員の家族130人を疎開

司会 満州国滅亡後、一部の役人、軍関係者は早々に引き揚げ、その後は満鉄職員が自分らの交通の便を利用して引き揚げ、一般居留民をほとんど面倒みなかったというように聞いている。松田さんは非常に苦勞されたと思うが。

松田 国通も社員の家族を疎開させることになり、組織ができたのが10日。翌11日の朝3時から4時ごろに社に呼ばれて「通化の山の奥に行ってくれ」と言われた。お断りしたのだが、口説かれて行くことにした。朝の8時から9時ごろ、みんな新京駅に集まったが、軍と満鉄、特殊会社関係者がわんさと押し寄せた。それを整理し、列車が足りないというので時間がかかり、われわれが出発したのは結局、12日の朝2時ごろだったと思う。後で調べて分かったが、私が連れて行ったのは44世帯、130人だった。

国通本社から「とにかく持っていけ」といつてもらった金が6万5千円だった。通化の山の中へ行くというのが変更になり、奉天へ行き、鴨緑江を渡り平壤に着いたが、既に関東軍関係者の家族がいて、満鉄や特殊会社関係者の入る余地はないというので、最初は平壤に入れ、その後はだんだんその周辺にバラまいたのだった。遅くなればなるほど満州国境近くに回されるわけだ。われわれが平壤から鎮南浦に着いたのは14日のお昼ちょっと前で、各民家に分散した。

このときは在留邦人もおり、朝鮮人もいて心よく迎えてもらった。翌日は重大発表があるということで、終戦の詔勅を聴いた。その晩から混乱が始まった。港町なのでソ連兵がいつ来るか分からない。現地の人はソ連兵を迎えに行くとか言って騒いだりした。バラバラではどうもならない、組織化しなければならないというので委員会を作った。8月20日だったか、大体の数字をまとめようと調べたら、全部で1万1千人くらいいた。満鉄は1500人ぐらいいてコメや食料をふんだんに持っていた。何としても日本に帰りたいが、いつになるか分からない。8月末ごろ船が入ってきた。大連に帰る船だった。私どもは大連に帰っても捕まるからと言ったが、満鉄の連中はその船で大連に帰って行った。

国通社員の家族に手持ちの金を全部出してもらったら2万5千円。本

社から持ってきた6万5千円と合わせて9万円しかない。それも大部分満州国の紙幣だった。満州国紙幣は20日すぎになったら使えなくなるというので、疎開者の日本人がグループをつくっていろいろ折衝した。

北朝鮮各地では惨めな話がたくさんあったと思うが、幸いにしてうちの場合は朝鮮の中でも条件のよい地点であったのが一つ、もう一つは明治43年ごろからいる人たちもいたし、日本鉱業、三菱化成、昭和電工という有力会社の組織があったので、それらの幹部諸君が面倒みてくれた。われわれの組織をつくり、土地の人は土地の人の組織をつくり、いろんな人が中堅幹部になってくれた。満鉄の人たちが9月15日に大連に帰ったので、私が満州組の責任者になって土地の組織の人と3人で苦勞を共にしながらも比較的混乱もなく、計画的な集団脱出に成功した。

ともかく北朝鮮各地に比べてうまくいったと思う。国通社員の家族は130名だったが、7名生まれて亡くなったのが6名。結果的に1名増えた。帰るときには日本の現金で1人当たり550円渡して帰ってきた。**司会** 国通は第1の脱出後、2日くらいで出られたわけだが、何か優先的な便宜を図ってもらえたのか。

松田 国通も特殊会社に入っていたのでうまくいったが、他の特殊会社は金を持っていた。私たちは6万5千円しか持っていかなかった。

関口 国通は満鉄に次ぐ特殊会社だった。

司会 満州国を脱出するまで大変だったらしいね。

松田 結果的には一番早く行ったのが一番苦労した。私が日本人会の中にあって動き出したのが10月。金を持っていないので土地の人のためになることをして金を貸してもらわなければならない。女、子供ひくくめるめて7千人近い人のうち48%が16歳から45歳の女性だ。半分が女性なので変な事件を起こしてはいかんし、いずれにしてもみんなまとまっていなければならない。口でいえば簡単だが、13カ月間、女、子供を抱え

で大変だった。たまたま国通の家族が行った地域は立地条件が良かったと言えると思う。

関口 44世帯でどのくらい男がいたのか。

松田 女、子供がほとんどで、男は僕を入れて4人ぐらいだった。

東 第2陣がかわいそうだった。奉天で終戦になり、退職金はもらったが、マクワウリ一つが10円、20円もして退職金はほとんど使ってしまった。

悲惨な目に遭った開拓団

板垣 半年ぐらい前に満州国引揚者連盟が、いかに開拓団が惨めなことになったかという本を出した。私も買って読んだが、いかにソ連はけしからんことをやったか分かり、読んでいううちに憤激を覚えた。

関口 開拓団は関東軍の一翼であるという教育を受けて満州へ渡っており、自分の土地への愛着が強い。一般在留邦人も財産はあり、執着もあるが、開拓団はそういう教育を受けているので、最後まで抵抗するという気持ちが染み込んでいたため惨めな結果になった。

板垣 抵抗するものばかりでなく女、子供、赤ん坊に至るまで片っ端から火をつけて殺された。

関口 一番悲惨なのは開拓団の人たちですね。

宮沢 開拓民の収容所のあった近くにいたが、毎日死んだ人を馬車に積んで南嶺の方に持って行く。着ているものは剥いで凍っているからピンとなって、丸太か、こん棒のようになった死体を民間の関係者が南嶺の方に運んで行った。

皆さんあまりご存じないと思うが、国通の通信機はソ連、中共、国民党にはだいたい狙われた。国通は仕事の関係で通信機をたくさん持っていた。

た。まず狙ったのがソ連だ。ソ連軍が来て接收、引き揚げるときには半分以上機械を持って行ってしまった。中長鉄路公司のソ連人の要請で、われわれ10人余りが残った通信機を満鉄本社に運び、情報収集活動を継続した。皆さんがソ連に連行されたのもその当時と思う。

国民党の力が増大した21年2月ごろ、中央社責任者の劉竹舟が私のところに通信機がないか調べに来た。当時私どもの考えは、日本人は優秀だから必ず捲土重来できる。その際に使用するのだとして、国通の真ん中に秘密の部屋をつくり、そこ地下のボイラー室に通信機と部品を隠匿していた。やむなく秘密室の通信機を中央社に引き渡した。中央社は国通の機器を接收して通信網を開設する考えだったらしい。予想に反して少ないので私に疑惑の目を向けていた。

21年4月、中共軍がやってきて撃ち合いし、新京を押さえ、同時に新華社の者が国通を接收、ボイラー室の機器部品も全部とられた。かつて国通社員で中央社員の李華文は「宮沢が中共軍に通報し通信機全部を渡したんだらう。いずれ国民党の天下になったら殺してやる」と息巻いていたという。21年5月末、中共軍が新京を撤退する時、中共軍は国通の通信機材一切を梱包して奥地に運び去った。国通の通信機はソ連、中央社、新華社の争奪の的になった。

板垣 最初に入ってきたのはどこか。

宮沢 ソ連のタス、国民党の中央社、中共新華社の順。ソ連の出先は横の連絡が全然ないように感じた。国通にいたソ連情報員が引き揚げるとき、われわれの反対を押し切って通信機を持って行った。中長鉄路公司以「通信をやれ」と言われても仕事ができない。ソ連軍が「通信機を持って来ないとお前を帰国させない」と言うので、仕方なしにボイラー室の床下に隠してあるのを3台持っていったところ、「もっと探せ」ということで、苦心して5台でともかく傍受組織を作った。これも中共軍が奥地

に撤退するとき持つて行つた。最後には一つもなくなつた。

板垣 ソ連と土着の兵隊、国民党、中共軍の關係がよく分らない。

宮沢 最初に満州に入つてきた中共軍は八路軍^{はちろうぐん}が主体で、満州国軍を中共軍に改編入したが多い。もちろん幹部は中共軍の将校だ。

板垣 満州から引き揚げてきた人には「八路軍は軍律が厳しくて立派なものだ」という人と、「そうじゃない」という人の2通りある。

宮沢 本来の八路軍は軍規が嚴格で、満州軍を改編したのはとんでもないが多かつた。

佐々木 国通が非常に多数の通信機を整備してたのでソ連にも、中共にも、国民党にも狙われたという話だが、それより先に狙つたのが同盟だつた。私と宮沢が終戦直前に上京すると、古野社長が「お前たちのところに通信機材がうんとあるはずだから持つてこい。内地では爆撃でほとんど発信機がなくなつた。これでは本土上陸作戦の際の通信網は何ともならないから、お前たち2人帰つて担いでこい」と言うので、飛行機で国通と北支から運べる発信機は最大限運ばせようと手配して宮沢と2人帰つた。僕が北支にたどり着き、宮沢は満州にたどり着き、すぐ終戦になつて結局、予定通り運ぶことができなかった。

東 宮沢さんは終戦の当時、関東軍からウイスキーをもらつてきて何ケースも受信室に積んでいた。

宮沢 関東軍はがらんどうでたばこも酒もたくさんあり、持ち出した。国通の人はソ連軍から証明をもらつた。そうでないと強制徴発されるので、胸にロシア語でソ連の軍属であるとなつた。それで国通社員は大部分助かつた。

司会 軍票と満州紙幣はずつと使えたのか。

宮沢 終戦後、ソ連の軍票と交換した。ソ連が引き揚げた後は中共の軍票が出て回収を始めた。

逮捕、抑留へ

司会 12月になつて関口さん、東さん、桜井、松尾ら全部連れて行かれてソ連に抑留された。宮沢さんらは中共に連れて行かれた。中共は丁寧に優遇してくれ、ソ連は乱暴に扱つたというが、ソ連は新聞記者を特別扱いしなかつたようだね。

東 私は12月8日に引つ張られて、日本の海軍武官府にぶち込まれた。塚本さん、矢野さん、松田さん、三藤さん、関口さんがいる。私の後に桜井さん、松尾さんと野中部長が引つ張られてきた23日にアルマタ（現アルマトイ）に移動した。収容所では最初は関東軍からソ連がかつぱらつたものを着たり、食べたりしていたが、その年はソ連のウクライナ地方が荒らされて収穫がなかつたので、食べるものに苦労した。その冬と次の冬が一番辛かつた。その後、国通の一部職員がカラガンダに移された。

司会 最初は専門的な取り調べをされたのだろうね。

東 政治捕虜という感覚で調べられ、調書を取られた。「お前は何をやってたか」と聞かれ、英文のニュースを書いてたというのと、「資本主義国家に援助を与えた廉^{かど}でお前を罰する」と言われ、調書にサインせよと言う。サインしないと頑張つたが、サインしたらどうなるのか聞いたら「連れて行く」と言う。「シベリアか」と聞いたら、「それは分らん」、共產国に償いをしなければならないということだつた。

調書を取り、連れて行くことを正当化するのだ。政治捕虜という性格で連れて行かれたが、新京の市長もいたし、白系ロシア人もいた。前線から逃げてきた日本の兵隊もいた。持っているものは鉛筆まで全部取られた。非常に待遇が悪かつた。

関口 後で感じたことだが、11月いっぱい国通を接収した将校が引き

揚げ、後は自由になってソ連軍の情報活動をする必要はなくなった。途端に天野さんと塚本さんが捕まった。国通という国家的な性格から反ソ活動の張本人という格好で、編集局長の天野さん、理事長の塚本さんが引っ張られた。情報活動をやって残っていた国通関係者は30人ばかりで、名簿を出したと思う。それを片っ端から捕まえた。僕らも捕まったが、名簿に載っていないかった松尾君、桜井君らも引っ張られた。

捕虜は満州全体で何十万かいたが、その日本人を全部ソ連に連れて行って労働不足を補おうとした。ところがその人数を動員しても足りない。員数合わせというよりも一つの道具に国通の人たちも使われた。調書を取って反ソ活動をやったという証拠を取り、引っ張っていったのが実情だ。われわれの仲間はどういう連中ばかりで、軍服で捕虜になったのとは別だった。政治捕虜という形だったが、内容は政治捕虜じゃない。

宮沢 12月末、私は朝、寝込みをゲーペーウー(GPU、ソ連の秘密警察)に引っ張られ、2晩泊められて釈放された。ソ連軍が引き揚げた後、私はソ連の中長鉄路公司以通信課長という辞令をもらって渡辺、松尾さんと仕事をしていた。僕はそこの日本人の親玉みたいに扱われていた。後で聞いたところ、情報室長格のチダレンコ中佐に通信課の岩切君らが救出を頼んだらしい。宮沢がいなければ仕事ができないと訴え、チダレンコ中佐の奔走で釈放された。私は新京の女子師範学校の便所の横に監禁された。鉄のベッドと毛布2枚、寒さに震えていた。日本語のよく分からないソ連人に小突き回されただけだったが、どうなることかと思っていたら2日半ぐらいして釈放された。そのとき、GPUの親方みたいなのが、「お前は鉄路公司へ行って従前通り働け」ということで勘弁してもらった。

東 私が最初に連れて行かれたのは大同広場の裏にある小さな警察署だった。予備的な取り調べの結果、みんなが引っ張られそうなので、一

緒にいた病気の日本兵に、もし釈放されたら私の家に寄り、残っている富永(現在AP通信社)、野中部長、立石勇など英文部の連中に逃げるようメッセージを頼んだ。富永君だけ逃げて後は逃げなかった。立石君は米国籍のパスポートを持っているから大丈夫だと言っていた。ソ連司令部に「自分は米国人だ」と申し出たら引っ張られてしまった。立石君はマルシヤンスク収容所¹²³で死んだ。

松田 在郷軍人も捕まった。

佐々木 誰が最初に亡くなったのか。

関口 最初に亡くなったのは野中さんです。発疹チフスカ、栄養失調でしたか。塚本さん、天野さんたちは病弱だったが助かった。

司会 よくあなた方、重労働に耐えたね。

関口 東君は器用なものだからロシア語を覚え、通訳をやって重労働はあまりしなかったね。

東 武官府で取り調べられたとき、「ソ連に連れて行かれたらすぐ日本に帰れるのか」と質問した。少なくとも2、3年は帰れないと言われ、2、3年捕虜でいるならこれこそいい機会だからロシア語を覚えてやれと思いい、1年半でロシア語を覚えた。それで通訳になれと言われた。

仕事量によって食料を支給されるので、ノルマの本をほとんど暗記して、監督とよくけんかした。鉄筋コンクリートに穴を開けるため隊員1人をくれと言われ、人をやってもノルマの成績表に付けてくれない。そこでけんかして(ノルマの本の)何条何節にコンクリートを砕く作業のノルマがあるからそれをくれと頑張った。その仕事は非常に重労働なのでノルマが高い。あるとき、1日4時間交代で病弱の人を作業場に連れて行ったが、隊員全部に一番率の良い120%のノルマをとって帰り、一級食を食べられるように努力した。

中国の待遇は良心的

司会 宮沢君の中共行きはどうだった。招聘しょうへいされたのか。

宮沢 われわれ、好きで中共軍について行ったわけではなく、私を含めた国通人10名は全部通信と機械関係者で、強制的に連れて行かれたのが実情だ。ただ待遇が良心的で、ソ連のようなことは全くなかった。

司会 捕虜になったのか。

宮沢 捕虜ではない。先方では「留用」と称していた。ただし日本に帰ると個人個人の自由は認めなかった。最初働いたのは新華社。戦争中だから給与はコメ何斤14だけだった。現金でくれることはなく、昔の禄高ろくたかみたいなものだ。飯は全部給食。ソ連のようなピンハネとかはなかった。

佐々木 ソ連や中共に連れて行かれなかった人は、引き揚げまでどういう生活をしていたのか。

坂下 僕は21年の春に長春で国民党の機関紙を出すから来ないかということで参加した。僕と有岡、満日60（満州日日新聞）の政治部長をやっていた橋本忠彦君、それに康徳新聞系の連中とで編集10名、業務、印刷5、6名で、国民党の政治将校の孫という中佐が社長だった。これは最初、奉天の居留民会にいた満日の山本さんらが中心になって「東北導報」という新聞をつくり、長春にも支局をつくるということで召集された。長春駅前通りの岩間という宝石・カメラの商店を占領して3階に編集室を置き、週1回だったか、タブロイド判4ページの新聞を出した。

佐々木 仕事をした人はいいが、他の人はどうしたのか。

東 私の女房は私が引つ張られた後、引き揚げてくるまでどうにか食べていたらしい。満人をかわいがっていたので、助けてもらったと言っていた。しかし帰る途中、博多湾で2週間の検疫期間中、次男が病気で死んだ。母と女房はようやく東京へたどり着いて、松方さんに私の消息を

聞きに行った。松方さんは親切に同盟学寮125に泊めてくれたが、家族の方は分からず、松方さんに調べてもらい、日赤に入院していることが分かった。縁故のなかった人は随分苦労したと思う。

坂下 僕はいとこが新京で薬局をしていたので、そこで世話になった。遊んでいられないので露店で薬を売っていた。「東北導報」をやる前のことだ。薬の値段もよく分からず、マスクをかけて顔を隠し、薬を並べていたら満人が「これはいくらだ」「あれはいくらだ」と聞いてきて「お前は昔、相当なことをやったんだろ。普通の市民だったらマスクをしている者はいないからね」と冷やかす。別に密告するわけじゃないが、ヒヤツとしたことある。それでも露店で商売していたからよかったが、他の諸君はそれぞれ苦労していたと思う。

松田 鎮南浦ではわれわれに開拓団の医者がついてきた。ありとあらゆる薬を持っていたので、随分助かった。軍医さんで相当優秀な人もおり、僕らの所にかくまっていたからひやひやした。ソ連の軍医も現地に來た。ウクライナ出身の軍医で、「ウクライナ人だからロシア語は覚えなきゃいけないし、医学で使うドイツ語も覚えなきゃいけないし大変だ。日本の医学は非常に進んでおり、私は医者をしているが、あなたたちの国の医学にはかなわないと思っています」と言っていた。

（新聞通信調査会記録集「報道報国の旗の下で」）

満州崩壊と国通の終焉に立ち会う

山田一郎（元満州国通信社編集局）

ソ連機、新京を空襲

昭和20（1945）年8月9日の午前零時すぎ、新京（現長春）特別市の西郊、順天区西朝陽路雲鵲胡同の第4国通荘で、私は国籍不明機の首都空襲を知った。それは満州国崩壊を告知された最初の時刻であった。蜃気楼のように消え去った満州国の最後の年号でいえば、康德12年。私は数え年27歳。満州国通信社の遊軍記者であった。

満州国通信社は略称国通、中国語でコオトンと言った。私が住んでいた第4国通荘は社の独身寮であった。8月8日の夜10時半すぎ、夜勤を終えて整理部のデスクに「異状なし」と声掛けして、中央通りの本社から電車で独身寮へ帰ってきた。元気な若者たちはまだ起きていて、数人が私の部屋に集まって雑談していると、夜気を震わせて東の方から爆音が響いてきた。同時に地の底から鈍く低い響きが伝わってきた。

「空襲だ」―表へ飛び出して東の空を見ると、赤い灯を点滅させながら消えて行く機影らしいものがあった。旧城内の方角の空に火の手が上がっていた。「社へ行くぞ」。整理部へ電話すると出ない。やっと放送部の宿直が出ると、「空襲だ。城内の宮廷府の近くらしい」「整理部は？」「牡丹江と話している」「空襲の情報を同盟と全滿支社局へ流してくれ。寮の連中を連れてすぐ行くよ」

5月ごろから関東軍の根こそぎ動員が始まり、社会部長や次長、若手が相次いで召集された。政経、社会部は合体して取材部になり、関口（寿

二編集局次長が部長を兼任した。同盟の要請で中堅記者が4人も出向、宿直は中止になった。その代わりに新京放送局と合同して放送部ができた。編集局にスタジオを造り、定時ニュースを放送する体制ができた。シゲさんこと森繁久弥も時たま来ていたが、電話に出たのは宿直のアナウンサーだった。

現場は宮廷府近く

寮を飛び出した若者たち―入社早々の新人記者、カメラマン、オペレーターら4、5人―はマラソンランナーのように万寿大街、興安大路などを三、四十分も走り通し、中央通りの国通本社に駆け込んだ。玄関で最初に会ったのは華文部の梁記者だった。「早いな」と言うと、流ちょうな日本語で「空襲だからね」「どこだ」「五馬路だ。宮廷府の近くだよ。ソ連空軍だ」と声を潜めた。「現場を見たか」「近くに住んでいる友達に電話で聞いたよ」「米軍機じゃないのか」「違う」と彼は言った。私は関口局次長に電話した。「ご苦勞さん。俺もすぐ行く。君は現場へ行つて確認してくれ。同盟には至急報でバタを打つんだ」

バタは通信社独得の用語で「バンガイタノム」の略語だという。ニュースには通し番号を打つが、ニュース以前の情報にはナンバーを付けないでバタと言う。カメラの山本とサイドカーで東へ。皇帝溥儀の住む宮内府の前から、胡同（小路）を幾つか曲がると空襲跡の現場へ出た。焼け崩れた古い民家の中に3、4人の黒焦げの死体が転がっていた。張り番の満人系の警官に「飛行機を見たか」と聞いた。「オーデ（私）は見ない。しかし見た人は何人もいる。みんなソ連機だと言っている。低空で来たよ。2機か3機ね。最初にえい光弾、それから爆弾だ。赤い星が翼に付いていた。小型の爆撃機だ。アメリカ力ではないよ」

社へ帰って「ソ連機、新京空襲」のフラッシュを書き、整理部と通信部のデスクが新京―東京間の専用線で送信した。同盟からすぐ問い合わせてきた。「米軍機ではないか」「目撃者の警官はソ連機だと言っている」「この際は国籍不明機としておく」。同盟は慎重だった。関口編集局長やデスク、記者たちが続々出社してきた。「山田、すぐ関東軍報道部へ行ってくれ。楠本、國務院へ。鮫島は前線支局と連絡。太田は満鉄本社へ」と指示する「関さん」は鬼のような形相だった。

私は児玉源太郎大将の銅像が立つ児玉公園の前を突っ切り、関東軍司令部の正門に行った。衛兵に腕章と記者章を見せ、「報道部長の長谷川宇一大佐に急用だ」と叫んだ。やっと関門を通過して報道部へ入ると、部長は緊急会議中だと言って、顔見知りの塩谷大尉と森本少尉に会った。大尉は弟が同盟通信の記者で南方に従軍している。少尉は「毎日新聞」出身で応召し、報道部にいた。

「宮廷府の近くの空襲の跡を見てきた。ソ連機らしい」。2人は顔を見合わせた。「憲兵隊からの情報はないか」と聞くと、逆に「タス通信から何か入っているか」と聞いてきた。「ソ連政府が佐藤(尚武)大使に対日宣戦の通告をしているのではないか」。社を出るとき、関口局次長が「同盟情報だ」と私に言っていたことであつた。「東部方面、北部方面はどうなっているか」と私は聞いた。塩谷大尉は黙って2枚のガリ版刷りの紙を見せた。

「第一報。東寧、綏芬河正面の敵は攻撃を開始せり。八月九日午前零時」「第二報。牡丹江市街は敵の空襲を受けつつあり。午前零時三〇分」牡丹江の第一方面軍司令官喜多誠一大将から、関東軍総司令官山田乙三大将への発信である。塩谷大尉は私がメモを取らず頭の中に入れたのを見て、無言で極秘文書の箱の中に収めた。「関東軍は交戦しているのか」「虎頭、五常子の東部国境で激戦している。『侵襲せる敵を破摧すべ

し』と喜多司令官は全軍に指令した」「西部、北部正面は?」「満州里、ハイラル、孫呉、チチハルが攻撃を受けている。飛行機と戦車だ。第2方面軍は迎撃、交戦中だ」

参謀肩章を付けた将校たちが駆け回っている司令部から、私は走って帰社すると、関口次長に報告した。「すぐ記事にしてくれ。関東軍がソ連侵攻を認めたんだ。ニュースだよ」「ソ連軍、東部、北部国境に侵攻」のフラッシュを殴り書きし、本記を書いた。関口さんが「天野老からお前に電話だ」という。天野老とは編集局長の天野良和さんだ。万朝報の政治部長から聯合、同盟から国通の編集局長になった長老である。

同盟、全文取り消しを指示

「わしは同盟の古野(伊之助)社長と長電話していたが、松方(三郎)はどうしたと心配していたよ」とゆつくりと言う。「今から車で行くが、わしのデスクの後ろの金庫の中に『対ソ開戦時における報道要綱』という関東軍報道部の極秘文書がある。お前、それに基づいて1本、名文を書け」。その文書は内容空疎な生硬な文章であつた。「わが関東軍は北方静謐を念じ、対ソ協調を堅持して来たが、ソ連赤色政權は日ソ中立条約を破棄し、わが満州国に全面的攻勢に及んで来たことは、国際的道義において許されない暴挙である」「わが精銳関東軍並びに盟邦満州国は、不法に侵攻するソ連軍を随所に撃滅せんとするものである」

私は「これはひどい。悪文の見本だ」と関口さんとデスクの真鍋さんに言った。「文章の書き方を関東軍の報道部に指導してやるといい」。いつも冷静で落ち着いている政治部出身の真鍋デスクは「君の文章論は後で聞けよ。早く模範文を書けよ」と怒っていた。戦後、関口さんはシベリア抑留から帰って神戸新聞の専務、編集局長、真鍋さんは信濃毎日新

聞の常務、論説委員長になった。窓の外に夜明けの光が差し始め、続々と出社してきた記者たちが大声を上げて働いている中で、私は「ソ連、全線にわたって侵攻」「関東軍各部隊は激戦展開」というような文章を書き飛ばし、社会部出身の長山一デスクは大急ぎで目を通し、「ほい、来た」と整理部へ渡ししていく。不出来で不本意な原稿だった。

1時間後、私は深い奈落に落ちた。「9日午前6時発信。関東軍、ソ連軍を断乎排撃の記事は全文取り消されたし。理由は局長宛てに直接電話する」——同盟海外局長、長谷川才次から国通編集局長天野良和に宛てた電文である。天野さんと関口さんは「日本政府に停戦の動きがあるな」と言って、塚本義隆理事長の部屋へ急いで行った。8月6日、広島に「アトミック・ボム」が投下されたことを米国の放送で同盟と国通はキャッチしていた。ポツダム宣言の受諾を日本政府は極秘裏に進め、同盟は古野社長、長谷川才次局長の線で動いているという極秘情報があった。

私の記事は事実であって誤報ではない。しかし、反ソ的な点で現に進行している政治情勢の下で「全文取り消し」と同盟では判断したのであろう。信頼する先輩の鮫島記者と「ポツダム記事だ」「うまいことを言うな」と自嘲しているところへ、英文部の東信夫記者が来た。「おお、ヤングメン」と両手を広げ、「日本はポツダム宣言、受諾ね。APやロイターが流してるよ」と言った。東は交換船で帰って来た二世である。彼はシベリア抑留後、東京へ帰ってAP支局次長をして活躍した。

デスクへ戻った私は関口さんに「今日から関東軍を持ってくれ」と言われた。関東軍担当の記者の一人は同盟へ出向し、軍事通の一人は皮肉にも召集された。関東軍記者クラブ常駐の話はその前からあったが、私は遊軍に置いてくれと断った。憲兵隊が身元調べをするとか、思想調査をするとかの風評があった。真っ平ごめんと思っていたその関東軍の担

当を「非常事態だ」という言葉で私は承知させられた。

表へ出ると地平線の向こうから始まる大同大街、その沿道にそびえる関東軍司令部、児玉公園、国通の前の中央通りから新京駅へかけて、延々と続く避難民の行列があった。関東軍、軍属、満鉄、特殊会社の家族たちが優先的に避難する姿であった。

松方さんと長谷川さん

大連港を引き揚げる船上で「侵略の徒なりき青春の七年を凍土に埋めて泣きつつ帰る」という下手な歌を詠んだが、この気持ちは半世紀以上たった今も変わりはない。

ただ、書き残したことを大急ぎで追記すると、8月11日午後、関東軍の召集令状を編集局の真真中で「バカにするな」と叫んで破り捨てたこと。皮肉にもその関東軍に徴用の形で関口局次長以下5人が東辺道通化まで行き、関東軍の最後を見届けたことなどである。

22年2月、新京を脱出して大連から引き揚げてきたことも一つのエピソードであった。私は市政会館の共同通信社で松方編集局長に帰国の報告をしたが、松方さんは横地倫平社会部長の所へ私を連れて行き、「山田が帰ったよ」と紹介し、横地さんは「あしたから働いてくれ」と言った。栄養失調で肋膜炎を患っていた私は、郷里の高知で静養したいと断った。

8月、高知の街で時事通信社高松支社長の藤川佐吉さん(元国通整理部長)に会った。「遊んでいるなら時事へ入れ」と言われて高知支局へ入った。追っかけて松方さんから「共同採用」の通知が来て、私は自分の浅慮を悔やんだ。高知にいた福岡誠一さん(元同盟南方総社長)に相談すると、「長谷川(才次)より松方が先約だろう」と言われ、共同の高知支局へ勤めた。

24年4月、本社社会部に転勤した。ある日の朝10時前、経済部次長の渡辺孟次さん（後の共同通信社社長）と市政会館の玄関で長谷川才次さんに会った。長谷川さんは「孟ちゃん、遅いぞ。おれはひと仕事したよ」と言い、私を見て「この男は？」という顔をした。孟ちゃんは照れ隠しに「国通にいた山田君です」と紹介した。

私は、私の「ソ連参戦」の記事を全文取り消しにした、大きな存在のジャーナリストと初めて対面した。長谷川さんと私の対談は2日後に行われたが、松方さんなど2、3の人に話しただけで、むろん文章にしたことはない。それを書く紙数も尽きたようである。

（「新聞通信調査会報」第562号 2008年11月1日発行）